ん）、×「玉山程生」は、反対に賈島が故郷に近づいたことを喜んでいると捉えた（↑ⓑ「幷州を故郷のように思っていると捉えた」という内容と合致しません）。

×②「謝枋得」は、「どれだけ長く暮らしていても、幷州は故郷ではない」という趣旨だと考え（↑ⓐの内容と合致しません）、×「玉山程生」も同様に、賈島が幷州から故郷に戻りたいと思っていると捉えた（↑ⓑの内容と合致しません）。

×③「謝枋得」は、「昼も夜も、故郷に帰ることばかりを考えている」という趣旨だと考え（↑ⓐの内容と合致しません）、○「玉山程生」は、反対に賈島が長年暮らした幷州から去りがたく思っていると捉えた（↑ⓑの内容と合致）。

×④「謝枋得」は、「桑乾河を渡ることで、やっと故郷に近づいた」という趣旨だと考え（↑ⓐの内容と合致しません）、×「玉山程生」は、反対に賈島が故郷よりも幷州の方に愛着を感じていると捉えた（↑ⓑの内容と合致しません）。

○⑤**「謝枋得」は、「長年暮らした幷州が、まるで本当の故郷のように思われる」という趣旨だと考え**（↑ⓐの内容と合致）、**「玉山程生」も同様に、賈島が幷州を故郷のように思っていると捉えた**（↑ⓑの内容と合致）。

問6（本文の構成）**本文の各段落の構成はどうなっているか**

35

設問の意図 本文の各段落の構成が的確に捉えられているかどうか。

アプローチ **第二段落に示された筆者の考えを的確に読み取ります。**

本文は、**第一段落で「謝枋得」の解釈を提示し、第二段落では「玉山程生」の考えを紹介し、第三段落では筆者の考えを示す**という構成になっています。第三段落で筆者は、「其意恨下久客ニ（クトナリテ）幷州一、遠隔中故郷上（彼の気持ちとしては長い間幷州に身を寄せ、遠く故郷から離れてしまっていることを思い悩んでいたのだ）と述べています。ここから筆者の考えは**「幷州を故郷と思っている」という「謝枋得」の見解とは正反対のものであること**が分かります。

正解の確認

×①賈島の詩をめぐる「謝枋得」と筆者の対立を明確化した第一段落（↑第一段落で提示されているのは「謝枋得」の解釈だけです）をもとに、第二段落ではさらに「玉山程生」の考えを紹介（↑第二段落では「玉山程生」の考えが示されています）し、×第三段落では、「玉山程生」の意見を踏まえた上で筆者が新たに議論を展開（↑第三段落で述べられている筆者の考えは、「玉山程生」の意見を踏まえたものではありません）している。

○②**「謝枋得」の賈島の詩についての解釈を紹介した第一段落**（↑第一段落では、「謝枋得」の解釈が提示されています）**を踏まえて、第二段落ではそれに対する「玉山程生」の考えにふれ**（↑第二段落では「玉山程生」の考えについてふれています）、**第三段落では、「謝枋得」の解釈に反論するかたちで筆者の見解が示されている**（↑第三段落で述べられている筆者の考えは、「謝枋得」の解釈とは異なるものです）。

×③「謝枋得」が賈島の詩だと主張する詩を紹介した第一段落（↑賈島の詩であるかどうかについての議論は、本文の趣旨とはまったく無関係です）に続き、第二段落ではそれに対する「玉山程生」の意見を紹介（↑「玉山程生」も賈島の詩であるかどうかについて意見を述べているのではありません）し、×第三段落では、新たに発見された賈島の詩を踏まえての筆者の考えが述べられている（↑賈島の詩が新たに発見されたなどとは書かれていません）。

×④第一段落では「謝枋得」の賈島の詩についての議論のいきさつが述べられ（↑「議論のいきさつ」ではなく、解釈です）、×第二段落ではそれに対する「玉山程生」の考えを紹介し（↑「議論のいきさつ」についての考えではありません）、×第三段落では、「玉山程生」に賛同するかたちで筆者の意見が論じられている（↑筆者の考えは結果として「玉山程生」の考えとも異なるものです）。

×⑤第一段落では賈島の詩に対する「謝枋得」と「玉山程生」との議論が紹介され（↑第一段落で紹介されているのは「謝枋得」の解釈だけです）、さらに×第二段落では筆者と「玉山程生」の意見の相違を示し（↑筆者と「玉山程生」の意見の相違が明らかになるのは第三段落です）、×第三段落では、三者の意見を筆者がまとめるかたちになっている（↑筆者は自身の考えと「謝枋得」や「玉山程生」の考えをまとめようとしているわけではありません）。

3 評論 野矢茂樹『語りえぬものを語る』

解答

設問	問1				問2	問3	問4	問5	問6(i)(ii)
解答番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
正解	③	④	⑤	①	⑤	②	⑤	①	③	④	①
配点	2	2	2	2	2	8	8	8	8	4	4
難易度	★★	★	★★	★	★★	★	★★	★	★★	★	★★

出典 **『語りえぬものを語る』**（二〇一一年・講談社）

標題は、哲学者ウィトゲンシュタインの主著『論理哲学論考』の最後の言葉「語りえぬものについては沈黙しなければならない」を受けたもの。同書を徹底的に読み解き、日本語訳も刊行している筆者が、しかしウィトゲンシュタインに抗して語りえないものを哲学することを模索した一冊である。読み進めていくなかで筆者が手さぐりで考えているさまが伝わってきて、哲学することの一端を追体験できるはずだ。なお、本文は「26　科学は世界を語り尽くせない」の一節。

筆者　**野矢茂樹**　一九五四（昭和二九）年。東京都生まれ。哲学者。心身問題、認識論、他者論などの哲学的諸問題を扱うほか、論理学などの入門書にも定評がある。著書に『論理学』『心と他者』『哲学の謎』『無限論の教室』『哲学・航海日誌』『はじめて考えるときのように』『論理トレーニング』など多数。

キーワード・重要語

◉科学（25行目など）
一般に、西洋近代で成立した自然科学を指す。誰がいつどこで、といった視点の特殊性（＝主観）に関係なく認められる（＝客観的）事柄のみを科学的事実として認定するといった知的枠組が科学の基本である。加えて、科学的知識には、反証可能性（＝その知識に反する事柄が認められたら、その知識は科学的には誤りであったと認定できること）が備わっていることも必要だ。つまり、誤りであると立証される余地のない事柄には、最初から科学的知識の資格がないのである。

◉決定論（2行目）**と自由**（80行目）
因果関係が、人間の意志に先立って、あらかじめ決まっている（運命）とする考え方が決定論（運命論）。これに対して、因果関係は意志のはたらきによって変更される余地がある状態が自由である。このように、決定論と自由は対立する概念であり、両者の対比を軸とした評論文は入試でもときおり見られる。

【理念（りねん／63、64、69、79行目**】**ある物事に関する根本の考え。

読解のポイント **本文全体を貫く筆者の考えを読み取る**

本文のところどころで、科学（理科）に関する一定の知識を前提としたような記述もないわけではないが、そうした細部に過度にとらわれる必要はない。あくまで本文の論旨（＝筆者の言おうとしていること）を丹念に追っていけば、本文の論点が、〈科学は現実の世界をそのまま記述することはできない〉、したがって、**〈科学による記述と、それから逸脱する現実世界との齟齬（そご）が、人間による自由な語りの契機となる〉**という一連の主張へと集約されていることが把握できるはずである。本文の中で、筆者の主張がより端的に打ち出されている箇所はどこであり、またそうした主張を下支えする内容（たとえば具体例の提示）はどこなのかを感知しながら読むこと、すなわち、本文を**平板なものとしてではなく、起伏のある構造をもったものとして読む**ことが、評論文を的確に読み解くカギとなるのである。

テーマ解説 **科学**

近代科学は世界を客観的に捉え、世界のうちにさまざまな法則を見出（いだ）すことによって、たとえば物質をさまざまに加工して高度な人工物を作り出すことを可能にした。そうした科学技術の恩恵は、私たちの生活の至る所からうかがい知ることができるだろう。しかし他方で、そうした科学技術の産物が、かえって世界や人間にとって好ましからざる影響を及ぼしてしまう事例も生じているのが現実である。科学は客観性という尺度をもつことで多大な成果をもたらしたわけだが、裏を返せば、**〈客観的に世界を把握する〉という観点そのものもまた物事の捉え方の一つでしかない**とも言えるのである。このように、科学を論じた文章においては、**科学がもつ可能性と限界を模索する**といった趣旨のものが多く出題される傾向にある。

入試情報

センター試験では科学を扱った文章からの出題は多いとまではいえないものの、科学は近代の成立を語るうえでは欠かせないトピックであり、また現代社会と科学の密接なかかわりは言うまでもないため、いつ出題されてもおかしくないテーマである。類題での練習を重ねておくことが望ましい。

読書案内

野矢茂樹『入門！　論理学』（二〇〇六年・中公新書）
▼論理的に考えることの意味と基本的な方法が、楽しく読めてよくわかる一冊。
池内了（さとる）『疑似科学入門』（二〇〇八年・岩波新書）
▼科学とは似て非なるものの今日的形態を三分類で示し、その克服法をさぐる。

本文難易度☆☆／本誌P70〜78

本文の読解

…論旨の展開　赤字…キーワード

キーワードに注目して読もう

1 なるほど自然科学、とりわけ物理学の法則は、「たいてい成り立つ」というものではなく「つねに必ず成り立つ」という厳格な法則である。だが私は、そうした厳格な法則は A 世界の決定論的なあり方を描写したものではない（そもそも世界を描写したものではない）と考えている。私の議論を示すために、B 地震観測所の活動を単純化して捉えたものをモデル・ケースとすることにしよう。

2 地震観測において震源は次のように特定される。地震には縦波と横波があり、縦波は横波よりも速く伝わる。そこで、運動方程式やフックの法則を用いて、縦波の伝播速度と横波の伝播速度の公式が得られる。この公式を用い、縦波と横波の(ア)トウタツ時間の差から震源までの距離を計算する。震源は、観測所Aからの距離がa、観測所Bからの距離がb、観測所Cからの距離がc、……の位置にある。そこで、それらがうまく一つの地点をまとまず、震源が特定できないことも考えられる。いま、そんな具合の悪い結果が生じたとしよう。そのとき、どうなるだろうか。「うまくいかなかった、じゃあ、運動方程式やフックの法則はまちがっていたのだ」と、そうなるだろうか。

3 もちろんそんなことになるわけがない。なぜか。――結果がうまく出せなかったことに対して、運動方程式やフックの法則以外にいくらでも原因が考えられるからである。例えば、地殻や地球の内部構造についてのわれわれの事実認識が違っていたと考えることができる。地震波の速度の公式を実際に適用するためには、地震が伝わる媒体（地殻や地球の内部）の固さが分かっていなければならない。そこで、もし実際と異なる固さを想定していたならば、計算結果も実際と異なることになる。逆に言えば、結果の不具合は公式そのものがまちがっていたからではなく、公式を適用するさいの前提の一つがまちがっていたからだと解釈されるのである。そして、それは地殻や地球内部の状態について、われわれに新たな知見をもたらしうるものともなる。例えば、昔はマントルは柔らかいものと考えられていたが、いまでは固体であると考えられている。地震の観測は、そのように地球内部の構造を知るための重要な手段ともなっている。

4 このことは、地震観測所でどのような一見不都合な結果が生じようとも、それは運動方程式やフックの法則に対する反証例とはならないことを示している。一般的に述べて、法則だけでは何も結果を出せない。なんらかの既知の事実に法則を適用して初めて、未知の事実が知られるのである。とすれば、うまい結果が出なかった場合、それは法則を反証するものとしてではなく、既知の事実とされていたものに誤りか見落としがあったからだと考えることがつねに可能となる。しかもそれはけっして法則を反証から守るための場当たり的な改訂ではない。地球の内部構造についての知識がそのようにして改訂されたように、(イ)見法則に反するように見える事実を説明しようとする努力の内に、科学はその生産力の大きな源泉をもっているのである。

5 そのような形でハッ(イ)キされた科学の生産性の事例で科学史上最も印象的な事例は、一八四六年の海王星の発見だろう。まだ太陽系の惑星として海王星が知られていなかったときに、天王星の軌道がニュートン力学に従った計算結果とずれていることが分かった。それは、ニュートン力学に対する一見したところの反例となる。しかし、だからといってニュートン力学がそれで反証されたわけではない。天王星の軌道計算は既知の事実にニュートン力学の諸法則を適用して計算される。そこで誤りは既知の事実とされていたものの方に向けられる。そうして、未知の惑星があるはずだと考えられ、現在海王星と呼ばれている新たな惑星が発見された。

6 こうした事例において、法則はいわば「探求の指針」として働いている。一見その法則に反したことが生じたならば、それはその法則がまちがっているからではなく、何か現実の方に未知の原因があるに違いないとして、現実をその方向で解釈するよう促される。法則は「この法則が維持されるように現実を解釈せよ」という探求の指針を与えるのである。地震観測の事例でいえば、運動方程式やフックの法則は地震観測という活動を支える枠組として固定されており、それゆえ地震観測という活動によっては反証されえない。不都合な結果が生じたときには、「運動方程式やフックの法則が維持されるように地殻および地球の内部構造を捉えよ」という指針に従って探求が進められるのである。

7 法則が厳格に成立するのは、探求の指針を与えるという、法則のこのトク(ウ)イな性格のゆえにほかならない。法則は、ひとたび探求の指針として採用されたならば、現実世界がその法則に反するという事実によってはけっして反証されない。「この法則が維持されるように世界を解釈せよ」という指針のもとに探求が為されるかぎり、その探求の中では、その法則は必然的に維持されることになる。だが、これはその法則がこの世界において厳格に成り立っているということを意味するものではない。「フックの法則が維持されるように地球の内部構造を調べよ」という探求においてフックの法則が成立するのは当然のことである。法則が厳格に成立するのは、世界が厳格にその法則に従っているからではなく、その探求のあり方が、その法則を枠組とし、反証不可能なものとして扱うからにほかならない。

8 C フックの法則を例にとっても少し詳しく見てみよう。フックの法則とは、「$F=-\alpha x$」という式で表わされ、ばねのような弾性体に力を加えると、その力（F）に比例して弾性体に力と逆方向の伸び（x）が見られる、というものである。ゴムひもに重りをぶらさげて、ゴムひもの伸びを測り、重さと伸びの(エ)ソウカンをグラフに描くといった実験を理科の授業で行なったという人も多いのではないだろうか。だが、厳密なことを言うならば、フックの法則は「完全に均質な弾性体」でしか成立しない。それゆえ、ゴムひものような必ずしも均質ではない物質で厳格に成り立つわけはないのである。そして、この世界に完全に均質な弾性体などありはしないだろうから、すべての物質はただ近似的にのみフックの法則を満たすにすぎない。つまり、フックの法則はわれわれのこの世界のあり方を正確に描写したものではない。

9 他にも例えば、気体の体積・圧力・温度の間に成り立つ関係を与えるボイル＝シャルルの法則は、気体分子の間に力が働かないとされる理想気体において成り立つものであり、現実のいかなる気体でも成立しない法則である。あるいは、万有引力の法則は宇宙に二つの物体しかないときにお互いに働く力を規定したものであるが、宇宙にただ二つの物体しかないというのはありえない状況であるから、現実の宇宙において正確にその法則に従う現象が観察されることはない。それゆえ、これらの法則もまた、現実世界のあり方を描写したものではない。

10 では法則は、世界のあり方を描写したものではないとすれば、何なのか。――探求の指針を与える。これが、自然科学において厳格な法則がもっている役割にほかならない。すなわち、「この法則が維持されるように現実を解釈せよ」と探求の指針を与えるのである。

11 こうした指針は、法則と現実世界のあり方がずれていることを、むしろ積極的に認める。ゴムひもの伸びがフックの法則からずれるのは、ゴムひもが完全に均質な物質ではないからである。空気がボイル＝シャルルの法則からずれたふるまいをするのは、気体分子が分子間力をもつからである。逆に言えば、これらの法則が語り出しているのは現実世界ではなく、完全に均質な物質や理想気体から成り立つ理念的な世界にほかならない。われわれは、自然科学が描き出した理念的な世界を現実世界にあてがい、その理念的な世界からこの現実世界を透かし見て、そのずれを見積もることにより、この世界についてさまざまに語り出してきたのである。

12 決定論の話に戻ろう。決定論は、「できごとAが生じると、それが原因となってつねに必ずできごとBが生じる」という厳格な因果法則がこの世界には成り立つ、と信じている。この信念に対して、自然科学は(オ)エングンとなりうるのか。

13 ここまでの私の議論がもちがいでなければ、答えは否定的である。厳格な法則はそもそも世界を描写したものではない。それゆえ、それは世界が決定論的なあり方をしていることを示すものではありえない。なるほど、科学は決定論的な理念的世界像を描き出すかもしれない。だがそれは、けっして世界がその通りであるという主張として素朴に理解されるべきではない。現実世界は科学が描き出す決定論的な世界像からたえずはみ出し続ける。科学はそのずれを見積もるべく、決定論的世界像を現実世界にあてがい、そこからこの現実世界を透かし見るのである。

14 現実には、人間が関与する現象は言うまでもなく、まったく同じことが繰り返されるということはない。毎日毎年同じように昇っているように見える太陽も、完全に同じ昇り方をすることなどありはしない。枝から落ちる木の葉は言うまでもなく、手から放したリンゴでさえ、厳密には二度と同じ落ち方はしない。あらゆる現象は二度と反復されることのない一回的なものである。他方、自然科学は、厳格な法則を提示し、条件さえ揃えば完全に同じ現象が何度でも反復されるという自然像を描く。だが、この現実世界は、そのような自然科学の自然像からつねに、しかも思いもよらぬ仕方で、はみ出していく。

15 科学が世界を語り尽くせないのは、科学の限界のゆえではない。そもそも世界は語り尽くせないのである。世界は、私を驚かしうる。実在は、自然科学を含め、言語によって語り出されたあらゆる理念的世界からはみ出していく。実在とは、語られた世界からはみ出していく力にほかならない。その力を自分自身に、人間の行為に見てとるとき、そこには「自由の物語」を語り出す余地も生まれる。

要約しよう

□に本文から適語を入れなさい。

1 自然科学の法則
決定論的な世界像を提示しない　問2

2〜5 地震観測等の事例に見る法則の位置づけ
具合の悪い観測結果が生じても……
・公式そのものが誤っているとは考えない
・既知の「事実」に誤り、見落としがあると解釈
←
科学にとって新たな知見を得る手がかり　問3

6・7 法則は「探求の指針」を与える
法則は「この法則が維持されるように現実を解釈せよ」という「ⓐ　　」として機能する
←
科学的探求の中では、法則は厳格に成り立つ（＝ⓑ　　不可能）ものとして扱われる

8〜11 法則の果たす役割とは？
・フックの法則…完全に均質な弾性体でのみ成立
・ボイル＝シャルルの法則…理想気体でのみ成立
・万有引力の法則…宇宙に物体が二つしかない場合にのみ成立
＝
・法則が描写しているのは ⓒ　　な世界像

1 法則は、世界の決定論的なあり方を描写したものではない。

2〜5 科学では、法則の通りにならない観測結果が出ても、法則が誤っているとはせず、むしろ従来事実とみなされていたことの方に誤りか見落としがあったと考えることで、新たな知見を得ようとする。

6・7 自然科学の法則は、「この法則が維持されるように世界を解釈せよ」という探求の指針として働いている。

8〜11 法則は、現実には成立しない理念的な世界を語ったものであり、そうした理念的世界と現実世界とのずれを見積もることで、この世界についてさまざまに語ることができる。

12〜14 自然科学が提示する厳格な法則は、反復可能な自然像を描くが、それはあらゆる現象が一回的である現実世界を示すものではありえない。

15 世界は語り尽くせない。言語による理念的世界からはみ出す実在の力によってこそ、自由の物語を語る余地が生じる。

百字要約

自然科学の法則は現実世界の描写ではなく、世界を解釈するうえでの探求の指針の役割を果たしている。法則の示す理念的世界像と現実世界のずれを見積もることで、人間は現実世界について自由に語り出すことができる。

100 80 60 40 20

構造をとらえよう

1 自然科学の法則
決定論的な世界像を提示しない　問2

2〜5 地震観測等の事例に見る法則の位置づけ
具合の悪い観測結果が生じても……
・公式そのものが誤っているとは考えない
・既知の「事実」に誤り、見落としがあると解釈
←
科学にとって新たな知見を得る手がかり　問3

6・7 法則は「探求の指針」を与える
法則は「この法則が維持されるように現実を解釈せよ」という「ⓐ　　」として機能する
←
科学的探求の中では、法則は厳格に成り立つ（＝ⓑ　　不可能）ものとして扱われる

8〜11 法則の果たす役割とは？
・フックの法則…完全に均質な弾性体でのみ成立
・ボイル＝シャルルの法則…理想気体でのみ成立
・万有引力の法則…宇宙に物体が二つしかない場合にのみ成立
＝
・法則が描写しているのは ⓒ　　な世界像

12〜14 理念的な世界像からはみ出す現実世界
理念的世界像…同一条件下で ⓕ　　可能
⇔
現実世界…あらゆる現象は ⓖ　　なもの
←
理念的な世界と現実世界との ⓔ　　を見積もり、この世界を多様に語り出す　問5
←
法則は「探求の指針」を与える
←
・法則は ⓓ　　の描写ではない　問4

15 「自由の物語」の可能性
言語により語り出される ⓘ　　世界
＞
ⓙ　　（＝語られた世界からはみ出す力）
・法則は世界の ⓗ　　的なあり方を示すものではない
・現実世界は、科学の世界像からたえずはみ出す
→その力を人間の行為に見てとるとき、「自由の物語」を語り出す余地が生まれる　問5

解答　ⓐ探求の指針　ⓑ反証　ⓒ理念的　ⓓ現実世界　ⓔずれ　ⓕ反復　ⓖ一回的　ⓗ決定論　ⓘ理念的　ⓙ実在

設問の解法

問1

(ア)トウタツ　到達　1
①廊下でテントウする　×転倒
②トウテツした論理　×透徹
③観光客がサットウする　○殺到
④コウトウ無稽な計画　×荒唐
⑤経済問題をトウギする　×討議

(イ)ハッキ　発揮　2
①カッキ的な出来事　×画期
②コウキな雰囲気の陶器　×高貴
③シンキ臭い話はよそう　×辛気
④キハツ性の高い薬品を扱う　○揮発
⑤ケッキ集会が開かれる　×決起

(ウ)トクイ　特異　3
①イゲンのある態度を示す　×威厳
②議論のスイイを見守る　×推移
③深いイケイの念を抱く　×畏敬
④彼のシンイは測りがたい　×真意
⑤イブツの混入が判明する　○異物

(エ)ソウカン　相関　4
①犯人のニンソウ書が出回る　○人相
②ソウイ工夫に満ちた作品　×創意
③メールをテンソウする　×転送
④未刊のソウコウが見つかる　×草稿
⑤山脈をジュウソウする　×縦走

(オ)エングン　援軍　5
①彼女とはトオエンの間柄だ　×遠縁
②舞台はダイダンエンを迎える　×大団円
③回転によりエンシン力が働く　×遠心
④会社のエンカクが語られる　×沿革
⑤既存の方法をエンヨウする　○援用

問2

内容説明　傍線部A「世界の決定論的なあり方」とあるが、それはどのようなあり方のことか。 6

設問の意図　「決定論」について、本文ではどのような説明がなされているか。

アプローチ　**決定論についての明確な定義が12段落にあることを押さえる。**

1 なるほど自然科学、とりわけ物理学の法則は、「たいてい成り立つ」というものではなく「つねに必ず成り立つ」という厳格な法則である。だが私は、そうした厳格な法則はA世界の決定論的なあり方を描写したもので[illegible]考えている。私の議論を示すために、B地震観測所の活動を単純化して捉えたものをモデル・ケースとすることにしよ[illegible]

（略）

12 決定論ⓑの話に戻ろう。ⓐ決定論は、「できごとAが生じると、それが原因となってつねに必ずできごとBが生じる」という厳格な因果法則がこの世界には成り立つ、と信じている。この信念に対して、自然科学は(オ)エングンとなりうるのか。

1段落を念頭においた記述

「決定論」とは、**ⓐ〈「できごとAが原因となってつねに必ずできごとBが生じる」という厳格な因果法則がⓑこの世界には成り立つ〉という考え方。**本文には「……と信じている」とあるが、そうした信念は「決定論的なあり方」の中身ではない。

正解の構造
ⓐ「できごとAが原因となってできごとBが生じる」という因果法則が、
ⓑつねに必ず（＝厳格に）成り立つ、
という、世界のあり方。

○②「ⓐある事象が生じる際には、それを原因として必ず別の何らかの事象が生じることになっており、世界はそのような因果関係のⓑ集積として成立しているというあり方。」
×①「世界とは……信念の体系に他ならない」が不適切（右の説明を参照）。
×③「世界はそれら両事象の関係を保証する」が不適切。これだと「世界」が「両事象」とは別に想定されていることになってしまう。
×④「経験上明らかであり」がⓑに反する。ⓑは経験によらず成り立つという意味。
×⑤「そうした因果法則の捉え方が世界の捉え方を一義的に規定している」が不適切。「決定論」とはⓐがあらかじめ決まっていることを言うのである。

問3

理由説明　傍線部B「地震観測所の活動を単純化して捉えたものをモデル・ケースとすることにしよう」とあるが、ここでこのような「モデル・ケース」が取り上げられることになったのはなぜか。 7

設問の意図　筆者は「地震観測所」の例を通じて、どういうことを示したいのか。

アプローチ　**ⓐ観測結果が法則に反する場合、ⓑどういう考え方を採らず、逆にどう考えるというのか、本文の説明から把握したうえで、ⓒそうしたあり方が科学全般に通じるものとして指摘されていることも押さえる。**

2 地震観測において（略）もしかしたら、それらの結果が一つの地点にまとまら[illegible]が特定できないことも考えられる。いま、そんなⓐ具合の悪い結果が生じたとしよう。そのとき、どうなるだろうか。「[illegible]かなかった、じゃあ、運動方程式やフックの法則はまちがっていたのだ」と、そうなるだろうか。
3 もちろんそんなことになるわけがない。なぜか。（略）[illegible]果がうまく出せなかったことに対して、運動方程式やフックの法則以外にⓑいくらでも原因が考えられるからである。（略）逆に言えば、結果の不具合は公式そのものがまちがってい[illegible]からではなく、公式を適用するさいの前提の一つがまちがっていたからだと解釈されるのである。（略）
4 このことはⓑ地震観測所でどのような一見不都合な結果が生じようとも、それは運動方程式やフックの法則に対する反証例とはならないことを示している。一般的に述べて、ⓐ法則だけでは何も結果を出せない。なんらかの既知の事実に法則を適用して初めて、未知の事実が知られるのである。とすれば、うまい結果が出なかった場合ⓑ、それは法則を反証するものとしてではなく、既知の事実とされていたものに誤りか見落としがあったからだと考えることがつねに可能となる。しかもそれはけっして法則を反証から守るための場当たり的な改訂ではない。地球の内部構造についての知識がそのようにして改訂されたようにⓒ、一見法則に反するように見える事実を説明しようとする努力の内に、科学はその生産力の大きな源泉をもっているのである。
（略）
6 こうした事例において、法則はいわば「探求の指針」として働いている。ⓐ一見その法則に反したことが生じたならばⓑ、それはその法則がまちがっているからではなく、何か現実の方に未知の原因があるに違いないとしてⓒ現実をその方向で解釈するよう促される。法則は、「この法則が維持されるように現実を解釈せよ」という探求の指針を与えるのである。地震観測の事例で言えば、運動方程式やフックの法則は地震観測という活動ⓑを支える枠組として固定されており、それゆえ地震観測という活動によっては反証されえない。ⓐ不都合なⓒ結果が生じたときには「運動方程式やフックの法則が維持されるように地殻および地球の内部構造を捉えよ」という指針に従って探求が為されるのである。
（略）

例を踏まえて一般的議論へ

ⓐまず筆者は、地震観測所の例を出すことで、**法則に反する観測結果が出たらどうするか**という問題提起を行っている。
ⓑそのうえで、**たとえ不都合な観測結果が出ても、法則の方が誤っているとは考えない**こと、むしろ逆に**不都合な観測結果は「既知の事実とされていたものに誤りか見落としがあった」**ことを示していると考え、**「法則が維持されるように地殻および地球の内部構造を捉えよ」うとする**というあり方が示される。
ⓒ以上は、地震観測所の例に限らず、より一般に**科学の生産力の源泉**である。

正解の構造
地震観測においては、
ⓐ観測結果が法則通りにならず、観測の目的が達成できない場合でも、
ⓑ法則ではなく既存の事実認識の方に修正すべき誤りがあると考えるが、
そうしたあり方が
ⓒ（地球の構造の把握に限らず、より一般に）科学の生産力の源となっている。

○⑤「ⓐ自然科学の法則に反する観測結果が得られても、ⓑ観測の前提である法則を疑うよりは、既存の現実認識の方に未知の事柄が潜んでいると考え、ⓒそこから新たな知見を求めるのが科学であるということを示すため。」
×①「法則の妥当性に疑問をさしはさむことは適切でない」のではなく、科学が「法則の妥当性」を前提として営まれているというのがⓑの論点。またⓒもない。
×②「法則に反する既知の事実に柔軟に対処する地道な努力が求められる」といった内容は本文にない。またⓑⓒもない。
×③「法則がうまく適用できない観測結果に直面することがかえって新たな知見をもたらす」は「ⓐはⓒだ」となっており、ⓑがなく説明不十分。
×④ⓐⓑはあるが、それを「妥当」としているのは「筆者」だけではなく「科学」全般。ここでは、筆者はそうした「科学」のあり方を説明しているのである。またⓒがない。

問4

内容説明　傍線部C「フックの法則を例にとってもう少し詳しく見てみよう」とあるが、ここで筆者は「もう少し詳しく見」ることを通じてどのようなことを示そうとしているのか。 8

設問の意図　傍線部以降の説明によって、いかなる新情報が提供されているのか。

アプローチ　**傍線部以後でより「詳しく」述べられているのが、ⓐ法則は理念的な世界を前提としており、ⓑ現実世界を描写できないことである点を押さえる。**

8 Cフックの法則を例にとってもう少し詳しく見てみよう。（略）厳密なことを言うならば、フックの法則はⓐ「完全に均質な弾性体」でしか成立しない。それゆえ、ゴムひものような必ずしも均質ではない物質で厳格に成り立つわけはないので[illegible]して、この世界にⓑ完全に均質な弾性体などありはしないだろうから、すべての物質はただ近似的にのみフックの法則を[illegible]にすぎない。つまり、フックの法則はわれわれのこの世界のあり方を正確に描写したものではない。
9 他にもⓐ例えば、気体の体積・圧力・温度の間に成り立つ関係を与えるボイル＝シャルルの法則[illegible]子の間に力が働かないとされる理想気体において成り立つものでありⓑ、現実のいかなる気体でも成立しない法則であ[illegible]万有引力の法則は宇宙に二つの物体しかないときにお互いに働く力を規定したものであるが、宇宙にただ二つの物体し[illegible]ないとい[illegible]のはありえない状況であるからⓑ現実の宇宙において正確にその法則に従う現象が観察されることはない。それゆえ、これらの法則もまた、現実世界のあり方を描写したものではない。
（略）
11 （略）これらの法則が語り出しているのは現実世界ではなくⓐ完全に均質な物質や理想気体から成り立つ理念的な世界にほかならない。われわれは、自然科学が描き出した理念的な世界を現実世界にあてがい、

類似を示す「もまた」

ⓐ傍線部以降では、フックの法則が「完全に均質な弾性体」を前提していると述べ、他の法則の説明も踏まえた11段落ではそれを**「理念的な世界」**と言い換えている。
ⓑしたがって、**法則は、理念的な世界とは異なる生身の現実世界を正確に描写したものではありえない。**傍線部以降でこの次第が詳しく述べられているのである。

正解の構造
ⓐ法則は、仮想された理念的な世界においてしか成立せず、
ⓑ現実世界を正確に描写することはできない。

○①「自然のしくみを探索する際の前提となっているⓐ法則は、物質をめぐる現実にはありえない状態を仮想したうえで成り立っているため、ⓑ世界の実際のありようを忠実に映し出す役割を果たすものではありえないということ。」
×②「単純な数式」と「複雑な世界」が「相容れない」という説明は本文にない。
×③観測において、法則の「忠実な再現が要請される」といった内容は本文にない。
×④〈探求の指針としての法則〉という議論は傍線部以前でなされていたことであり、「何がより詳しく述べられているのか」を問う題意を満たしていない。
×⑤④に同じ。また、「指針」という役割を否定的に述べている点でも不適切。

問5 〈内容説明〉 傍線部D「『自由の物語』を語り出す」とあるが、本文全体の内容に照らして、それはどういうことだと考えられるか。 9

設問の意図 本文の脈絡からして、「自由の物語」とはどういうことを意味するか。

アプローチ ⓐ現実世界は理念的な世界像を常に外れること、ⓑ人間はそのずれを通じて初めて実在の力を感知でき、ⓒ実在の世界を語る余地も生じることを押さえる。

11（略）

われわれはⓐ自然科学が描き出した理念的な世界を現実世界にあてがい、その理念的な世界からこの現実世界を透かし見てⓑそのずれを見積もることによりⓒこの世界についてさまざまに語り出していくのである。

13（略）[illegible]、科学は決定論的な理念的世界像を描き出すかもしれない。だがそれは、けっして世界がその通りであるという主張と[illegible]朴に理解されるべきではない。ⓐ現実世界は科学が描き出す決定論的な世界像からずれ、はみ出し続ける。科学はそのずれ[illegible]もるべく、決定論的世界像を現実世界にあてがい、そこからこの現実世界を透かし見るのである。

傍線部の言い換え

14（略）あらゆる現象は二度と反復されることのない一回的なものである。他方、自然科学は、厳格な法則を提示し、条件さえ揃えば完全に同じ現象が何度でも反復されるという自然像を描く。だがⓐ、この現実世界は、そのような自然科学の自然像からつねに、しかも思いもよらぬ仕方で、はみ出していく。

15 科学ⓐが世界を語り尽くせないのは、科学の限界のゆえではない。そもそも世界は語り尽くせないのである。世界は、私を驚かしうる。ⓐ実在は、自然科学を含め、言語によって語り出されたあらゆる理念的世界からずれていく。実在とは、語られた世界からたえずはみ出していく力にほかならないⓑ。その力を自分自身に、人間の行為に見てとるとき、そこにこそ、D「自由の物語」を語り出す余地も生まれる。

ⓐ自然科学は理念的な世界像を提示するが、現実世界は常にそこから逸脱する。
ⓑだが、人間はそうした逸脱を見積もることで、**実在の世界を感知できる**。
ⓒそうして感知した実在を、**さまざまに言葉にしていく（＝物語る）**のである。

▶**正解の構造**◀
ⓐ現実世界は理念的世界像からはつねにはみ出す（ずれる）。
ⓑ現実世界は、そうしたずれを通じて初めて感知される。
ⓒ人間は、そうして感知した現実世界を、多様な仕方で言葉にしていく。

○③「ⓐ理念的世界像を現実世界へと適用することで判明する両者の懸隔を通じて、ⓑ想定を超える多様な可能性をおびる現実世界の実相を感知し、ⓒそれを描き出していくということ。」

×①「実在の世界」に「還元されない世界のありよう」が不適切。人間が語り出そうとするのは、あくまで「実在の世界」である。

×②「世界像の限界にとらわれない人間ならではの能力を存分に展開していく」が不適切。「自由の物語」は、むしろ世界像の限界を利用することで可能となる。

×④「法則的把握」と「想像力」の「総合」といった内容は本文にない。

×⑤「理念的世界像」の「画一性からの脱却を企図」するという内容は本文にない。

問6(i) 〈表現説明〉 この文章の表現に関する説明。 10

アプローチ 該当する本文記述との照合を丁寧に行う。

× ①「どうなるだろうか」（第2段落）、「なぜか」（第3段落）、「何なのか」（第10段落）など、随所に疑問文を用いることを通じて、読者にいったん自身で答えを導き出してから先を読み進めるよう求めている。

× ②「地震観測」（第2段落ほか）、「海王星の発見」（第5段落）、「ボイル＝シャルルの法則」（第9段落）など、多様な事例を扱うことを通じて、議論が自然科学の各分野に均等に言及したものとなるよう配慮されている。

× ③ 第2段落で地震観測の方法をアルファベットの記号を用いて説明したり、第8段落でフックの法則の公式を明記したりすることを通じて、本文の議論が数式によっても提示可能なものであることが示唆されている。

○ ④ 第3段落、ならびに第10段落で用いられているダッシュ記号（「――」）は、直後に述べられる内容が直前で提示された疑問に対する端的な回答にあたる内容であることを予告する役割を果たしている。

正解の構造

○④ 3段落の「なぜか。――結果がうまく出せなかったことに対して……いくらでも原因が考えられるからである」、10段落の「何なのか。――探求の指針を与える」。これらはいずれも、〈問い――答え〉の関係を形成している。

×①疑問文は問題提起、ならびに以後の議論の道筋を示す役割を果たしている。

×②本文の事例が「自然科学の各分野に均等に言及」する役割をもつとは言えないし、たとえば生命科学分野などの事例がないことからしても不適切。

×③本文の議論が数式でも提示可能であることをうかがわせる記述は本文にない。

問6(ii) 〈構成説明〉 この文章の構成の説明。 11

アプローチ 本文全体の議論の展開を踏まえる。

○ ① 第1段落で一定の主張が示されたのち、第2段落～第11段落では主張を裏づける議論が展開され、冒頭の主張をより詳しく説明した第12段落～第14段落を受け継ぎながら、第15段落でより発展的な主張が提示されている。

× ② 第1段落～第7段落で議論の第一段階が提示されたのち、それを受けた第8段落～第11段落では議論の第二段階が示されており、以上を前提としつつ、第12段落～第15段落で筆者の主張が具体的に述べられている。

× ③ 第1段落で提起した主張について、第2段落～第3段落で具体例を挙げつつ説明し、第4段落で提起した主張については第5段落で具体例を挙げて説明するというように、全体を通じて主張とその説明が交互に繰り返されている。

× ④ 第1段落～第7段落で地球全体を射程に捉えた議論を行ったのち、第8段落～第14段落ではより身近な物理現象を取り上げ、第15段落では人間についての見解が示されており、全体が「自然から人間へ」という構成をとっている。

正解の構造

○①本文は、1段落で「法則は世界の決定論的なあり方を描写したものではない」という主張を明示したうえで、法則が「探求の指針」の役割を果たすことを11段落までで述べ、再び冒頭の論点に戻ったのち、最終15段落で、それまでの議論を前提に「自由の物語」の可能性を示唆する、という構成である。

×②1～7段落、8～11段落の議論が明確な二段階をなしているとは言えない。

×③「主張とその説明」という議論構成は、1～5段落についてはあてはまるものの、本文全体にまで及んでいるとは言えない。

×④「自然から人間へ」といった趣旨は本文からうかがえない。

3 小説 梅崎春生「魚の餌」

本文難易度☆☆／本誌P79～86

解答

設問	問1			問2	問3	問4	問5	問6	
解答番号	12	13	14	15	16	17	18	19	20
正解	③	⑤	⑤	①	⑤	④	③	②	⑥
配点	3	3	3	7	9	8	9	4	4
難易度	★	★	★	★	★★★	★★	★★★	★★	★★

問6は解答の順序は問わない。

出典「魚の餌」（一九五三年・「改造」に発表）
本作品は一九四三年に発表された「防波堤」の一部を分割、加筆削除を施して再発表された、四〇〇字詰め原稿用紙に換算して十数枚の短編である。書かれていることもささやかなエピソードにすぎない。そのエピソードが実際の体験に基づくとすれば、当時の作者は二十代の後半、本文にもあるように「まだ戦争中のこと」である。戦争も展望を失って国内は窮乏し、民衆は疲弊し、虚無的な倦怠感が漂う中、「僕」の心も知らず知らずすさんでいった。そのふとした表出が、貧しい兄弟の目に映じたに違いないことを、やりきれなく思い出している。それを、海面に放り出されたゴカイの鮮やかな描写でわずかに救済するのだ。「それから十年経つ」。同時代の読者は、等しく「十年」を顧みたことであろう。本文は一部省略して掲載した。

作者 梅崎春生 一九一五（大正四）年～一九六五（昭和四〇）年。福岡県生まれ。小説家。一九四二年陸軍に召集されるが、肺疾患の誤診をうけて即日帰郷となる。しかし四四年には海軍に召集され九州各地を転々とした。その間、その学歴（東京帝大卒）や兵役に就くには高い年齢等のゆえに、古参兵や上官から、非人間的で屈辱的な体験を強いられたらしい。そのあたりに、人間の暗部に降りたち、その暗闘を凝視しつつ描写する作風の根拠の一端があるとされるようだ。文学史上では「第一次戦後派」の旗手とされる。主な作品に「桜島」「ボロ家の春秋」「狂い凧」「幻化」など多数。

本文の特徴／言動の描写と示唆される内面
本文は一貫して「僕」の視点から一人称で語られている。このような場合、「僕」つまり語り手自身の内面は直接語られるが、それ以外の人物の内面は直接には語りえず、その描写される言動に間接的に示唆されることになるだろう。「僕」の目に映る「兄弟」は、どのような気持ちでいるのか。読者である我々もまた同じ視線で作品の中に入っていくのである。

読解のポイント 全体の背景の中で細部を読む
小説の問題ではしばしば**リード文**（本文に先立って、それまでのあらすじ等を解説したもの）が付される。それは**本文全体の背景**として見過ごせない。戦争中だというのに、日がな一日釣りをして過ごす後ろめたさ、そもそも戦争という状況自体のやりきれなさ、登場する兄弟の「貧相」な様子も、「僕」の「挙動や表情や声音」も、さらには「例のジタバタ」も、そのような背景抜きには説明できないものだ。本文はそのような戦時中の一光景を回想するという形式をとっているが、そこにも、嫌悪すべき当時の自分自身と出会うやりきれなさがある。一つ一つの場面における登場人物の内面、その表れとしての言動を分析することは、むろん重要だが、**小説自体の背景というものもまた大きな意味をもつものだ**。そのあたりを見失わないようにしたい。ひとまずは**リード文を軽視しない**ようにすることである。

テーマ解説 戦争と人間
戦争の最も重要な場は戦場である。が、それ以外にも決して無視されることのできない戦場以外の、戦闘行為以外の戦争があった。たとえば国民生活が全面的に戦時体制に統合・合理化される過程で圧殺されざるを得ない人間存在というような側面は、戦争から遠く隔てられた今日の我々には気づきにくいことだ。本作品の原型が書かれた一九四三年は学生生徒の徴兵免除が解かれ戦場に動員される「学徒出陣」の年、教育制度さえも解体され、人々の不安は戦争の勝敗を越えて、祖国の崩壊に及んでいる。そのような「終末観」めいた雰囲気を共有した人々が生きた**「戦後」を知ることは、現代文明について考察するうえでも重要なこと**だ。

入試情報
本作品は、戦時中を振り返って書かれた戦後の作品である。そのような作品がある時期に集中的に書かれたことは、体験されたことがはらんだ問題の深さ、人間存在というものに対する実存的な問いの重さを思えば当然である。センター試験では、異なる世代の作家ではあるが、二〇〇三年に野呂邦暢「白桃」が出題された。

読書案内
梅崎春生『桜島・日の果て・幻化』（一九八九年・講談社文芸文庫）
▼戦時下の極限状況における青春の心象風景。「幻化」は急逝した作者の遺作。
武田泰淳『ひかりごけ』（一九九二年・新潮文庫）
▼第一次戦後派に数えられる作者による、平面的な倫理観や正義感に対する抵抗と抗議。

本文の読解

…兄弟の心情・行動　…僕の心情・行動

心情の変化に注目して読もう

1 今でもその子供等のことを、僕は時に思い出す。その子供たちは、たしかに僕の餌箱から、餌を盗んだのだ。それはもう十年も前のことになる。

十年前というと、まだ戦争中のことだ。戦争中だというのに、大の男がせっせと防波堤に通って、魚を釣る。それも僕だけじゃなく、防波堤の常連とでも言ったようなのが、十人近くいた。

2 で、その日は曇っていた。沖の方が暗くて、夕立が来そうな気配もあった。僕は沖の方に向いて釣っていたのだ。防波堤の外側と内側とでは、その日によって釣れ方がちがうし、また釣れる魚の種類もちがう。その日は外側の方が当たりが良くて、皆そちら側に竿を出していたというわけだ。

その子供たちは、餌を使い果たしたのか、人の魚籠を見て廻ったり、脚を組んで沖を眺めたり、そんなことばかりしていたんだが——、ふと僕は餌をつけかえようとして、傍の餌箱を見た。するとゴカイがいなくなっている。

まだ十四余りの筈なのに、それが、二、三匹になっていて、それも箱のふちにひっかかって、だらしなく伸び縮みしている。盗ったな！　僕ははっと四辺を見廻した。その子供たちは、内側の方に腰かけている。ふり返って僕を眺めていたらしい小さい方の子供の視線と、僕の視線がパッと合った。急におびえた表情になって、視線を外らして、すこし身体を兄の方にずらすようにした。兄の方は、黙って釣糸を垂れたまま、じっと浮子を眺めている。

さっきまで釣りは止めて、そこらをウロチョロしていたし、またぼんやり海を眺めていたではないか。今海面を見詰めている兄の硬ばった顔は、痛いほど僕の視線を感じているに違いないのだ。僕は意地悪く、暫くじっとそこから視線を放さないでいた。そう言えば先刻、僕の傍で何かかすかな音がした。僕はそれに気をとめないでいたのだ。あの跫音は至極かるかった。そうか。餌を盗るのに、弟を手先に使ったな。そう僕は判断した。僕はそっと立ち上がった。弟がその僕をちらと横目で見た。僕は竿をたたんで帰り支度をした。餌箱を魚籠にしまい、かぶっているムギワラ帽の中から煙草とマッチを出し、火を点けた。それからそろそろと子供たちの方に近づいた。

僕が近づくと、二人は急に緊張したようだった。かたくなに僕の方を見ないようにして、ことに弟の方は背をかたくして、あきらかにおそれに満ちた表情でそっぽを向いている。子供の餌箱の中には、僕のと大体同じ型の同じ大きさのゴカイが、ぐにゃぐにゃともつれ合っていた。そして子供の浮子がピクッと大きく動いた。

「そら、引いてるじゃないか」

そう僕は言いかけて、途中で止めた。A兄は釣竿を上げようとはしない。じっとしている。浮子が動かなくなって、それからそろそろと竿を上げた。糸の先は針ばかりになっている。餌をとられたのだ。

「バカだな。しっかりしろ」

そう言おうとして、僕はやはり言わなかった。向こうも内心ジタバタしているが、別の意味でこちらもジタバタしている。その意識が急に僕の口辺を硬ばらせた。僕はそのまま背を向け、振り返らず、まっすぐに防波堤を岸の方に歩いた。

3 まあその日から一週間ばかり経った。やはり曇ったような天気のハッキリしない日だった。前の日とちがって、魚の当たりが悪かった。潮加減がよくなかったのだろう。僕は朝から釣れないでいい加減くさっていた。その上岩にひっかけて、糸を何本も切らしていた。昼の弁当を食い終わっても、僕の魚籠はほとんど空だった。そこでもう今日は止めて帰ろうと思ったのだ。

そしてふと振り返った時、そこにこの間の子供がいたのだ。この前と同じように、兄弟並んで、ぼんやりと海を眺めている。その時僕は、ほとんど無意識に、そして彼等に気付かれないように、自分の餌箱を脇に引き寄せていたのだ。次の瞬間、その自分のやり方が急にあらあらしく僕に反撥してきた。れいのジタバタが始まった。

「ふん」

と僕は思った。そんならあの子供たちに、今日はこちらから餌をわけてやる。そんな思いつきがとたんに頭をかすめた。もうどうせ帰るのだから、残りのゴカイは不用なわけだ。ゴカイというやつは、とても条件を良くしないと、翌日まではもたないのだ。

B僕は立ち上がった。餌箱をぶら下げて、ためらわずに兄弟に近づいて行った。

跫音を聞いて、兄弟は振り向いた。警戒するように二人の表情は突然するどくなった。兄の方は、よりそってきた弟をかばうように、身体を動かして構えた。その兄の眼付きは、僕をたじろがせるほど烈しかった。

「餌をやろうか。え？」

さり気なく言ったつもりだが、あるいは兄弟はその語調のうらに、なにか(ア)底意を感じたのかも知れない。

「餌がないのだろう。いらないのか」

子供の傍の餌箱は空で、底には小量の泥がかさかさに乾いている。兄は警戒の色をますます深め、じっと僕をにらんでいる。弟の方の顔はしだいにくずれて、今にも泣き出しそうな顔になった。しかし泣き出しはしなかった。眼をキラキラさせて、唇を噛みしめている。僕はしだいに自分のこんなバカな思い付きを後悔し始めていた。しかしこのままでは(イ)ひっこみがつかない。僕は少しいらだって来た。

「餌、欲しくないのか」

笑って見せようとしたが、笑い顔にならなかったかも知れない。僕は餌箱を眼の前につき出そうとした。その時突然、兄の方がいやにはっきりと答えた。

「いらん！」

そうか、と僕は言い、しかし俺はもう帰るし、どうせ餌は捨てるんだから、要るのなら置いてゆくよ、とまだ言い終わらないうちに、

C「いらん」

とも一度兄が言った。ほとんど同時に弟が唇を曲げるようにして、

D「いらないぞ」

とつけ加えた。兄の声は、前ほど(ウ)つっけんどんではなく、やや弱々しくひびいた。そうか、としかし僕もすこしむっとした。しばらく視線を合わせていたが、僕は突き出した餌箱の恰好がつかず、そのままゴカイを放り出すようにして海面に捨てた。三人の視線は一度にその方に動いた。

赤くもつれ合ったゴカイは、ひとかたまりのまま緑色を帯びた海水に落ち、そこでやわらかくほぐれ、数条の赤い模様をつくり、美しく伸び縮みしながら、しずかに沈んで行った。沈んで見えなくなるのを見届けて、僕は子供に背を向けた。

海沿道を歩いて帰りながら、僕はしだいに心が重かった。そして僕はあの貧相な兄弟のことをやはりあれこれと考えていた。たとえばあの子供たちは、父が居ない、母親だけのうちじゃないのか。そして彼等が釣って来る魚が、重要な家計の足しになると言ったような。いつも餌を使い果たしているのも、充分に餌を買うだけの余裕のないやりくりではないのか。

しかしそれはことごとく、僕の感傷のジタバタだったんだろう。つまり現実の摩擦を避けるために、僕の打った手が、逆に僕を惨めにしたに過ぎなかったのだろう。そしてその日以来、僕はその防波堤に行くのを止めた。釣り場を他に移してしまったのだ。だからその子供たちとも、もう顔を合わせたことはない。

4 それから十年経つ。あの兄弟も生きていれば、もう二十歳を越しているわけだ。僕が時々あの子供たちを思い出すように、あの兄弟も僕を思い出すだろうか。思い出すと仮定して、その思い出される僕自身のこと、彼等の眼に映った僕の挙動や表情や声音を思うと、僕は今でもちょっとやり切れなくなってくる。Eそれはあの時代の憂鬱と、二重に僕にかぶさって来るのだ。でも、あの緑の海に紅く伸縮するいくたのゴカイの姿は、ほんとに言いようもなく美しかったなあ。あんな美しいものは、僕はあまり見たことがない。この美しい終止符があるために、僕の記憶のやり切れなさも僅か救われているようなものだ。

要約しよう

構造をとらえよう

□に登場人物を入れなさい。

1 十年前の戦争中のこと

僕
・僕の餌を盗んだ子供等のことを今でも思い出す

2 兄弟と僕のギクシャクした関係

兄弟
・餌を使い果たしたのか
・僕の餌を盗んだ
・内心ジタバタしている　問2

ⓐ
・意地悪く視線を放さず、そろそろと近づく
うまく対応できず
こちらもジタバタしている

3 僕の感傷のジタバタ

ⓑ
・こちらから餌をわけてやろうとする　問3
・ひっこみがつかずゴカイを海に放り出す
しだいに心が重かった

ⓒ
・はじめはいやにはっきりと「いらん！」
・次にはやや弱々しく「いらん」

ⓓ
・兄とほとんど同時に唇を曲げるようにして「いらないぞ」　問4

4 あの時代の憂鬱と兄弟の眼に映った僕

それから十年経つ

ⓔ
・兄弟の眼に映った僕の挙動や表情や声音を思う
・今でもやり切れなくなってくる
……あの時代の憂鬱とともに　問5
僅かな救い
ゴカイの美しい終止符

1 その子供等のことを僕は時に思い出す。まだ戦争中のことだ。

2 その兄弟は僕の餌を盗んだ。僕が近づくと二人は恐れ、僕もうまく対応できず、互いに内心ジタバタしていた。

3 一週間後僕から餌をやろうとして拒絶され、僕はゴカイを海に捨てた。帰り道、その貧相な兄弟を思って僕は心が重かった。

4 兄弟の眼に映った僕を思うと今でもやり切れない。それは海に沈んでいったゴカイの美しさで僅かに救われはするが。

百字要約

戦争中のことだ。ある兄弟が僕の魚の餌を盗んだ。一週間後、僕から兄弟に餌をやろうとしたが、拒絶された。僕はゴカイを海に捨てた。兄弟の眼に映った僕を思うと、時代の憂鬱と重なって今でもやり切れなくなる。

100 80 60 40 20

解答　ⓐ僕　ⓑ僕　ⓒ兄　ⓓ弟　ⓔ僕

設問の解法

問1

(ア)底意を感じた　12

①ごまかしているのを見ぬいた
②しかけられたわなに気づいた
③したごころがあると思った
④したたかな意地を感じとった
⑤変わらぬ思いを見てとった

「底意」は「したごころ」の意味。兄弟は親切を素直には受け取れなかったのである。

(イ)ひっこみがつかない　13

①悔いを残したままになってしまう
②負けて引き下がるわけにはいかない
③相手に譲ることでしか解決しない
④取り下げることで事をおさめられない
⑤行きがかり上身を引くことができない

「ひっこみがつかない」で「途中で身を引けないこと」の意味。もう後には引けないのだ。

(ウ)つっけんどん　14

①思いきりよく断定的な口調
②歯切れよくさわやかな言動
③意地が強くかたくなな姿勢
④相手にせず軽んずる物言い
⑤とげとげしく不親切な態度

「つっけんどん」は「不親切でとげとげしい様子」の意味。兄の態度が弱気になったのだ。

問2 心情説明　**傍線部A「兄は釣竿を上げようとはしない。じっとしている」とあるが、ここでの「兄」の説明。**　15

設問の意図 引いているのに釣竿を上げずじっとしている「兄」の言動からうかがわれる心情はどのようなものか。

アプローチ **ⓐこの場面での背景とⓑ釣竿を上げずにいる「兄」の内面を読み取る。**

> ⓐ盗ったな！　僕ははっと四辺を見廻した。その子供たちは、内側の方に腰かけているⓐふり返って僕を眺めていたらしい小さい方の子供の視線と、僕の視線がパッと合った。急におびえた表情になって、視線を外らして、すこし身体を兄の方にずらすようにしたⓑ。兄の方は、黙って釣糸を垂れたまま、じっと浮子を眺めている。
> ⓑさっきまで釣りは止めて、そこらをウロチョロしていたし、またぼんやり海を眺めてい[illegible]いか。今海面を見詰めている兄の硬ばった顔は、痛いほど僕の視線を感じているに違いないのだ。僕は意地悪く、暫く[illegible]こから視線を放さないでいた。
> （略）
> ⓐ僕が近づくとⓑ二人は急に緊張したようだった。かたくなに僕の方を見ないようにして、[illegible]弟の方は背をかたくして、あきらかにおそれに満ちた表情でそっぽを向いている。子供の餌箱の中には、僕のと大体同[illegible]じ大きさのゴカイが、ぐにゃぐに[illegible]っていた。そしてⓑ子供の浮子がピクッと大きく動いた。
> 「そ[illegible]るじゃないか」
> そ[illegible]けて、途中で止めたⓑ。A兄は釣竿を上げようとはしない。じっとしている。浮子が動かなくなって、それからそろ[illegible]げた。糸の先は針ばかりになっている。餌をとられたのだ。
>
> 背景（僕の行動）から二人の内面へ
> この背景と言動をつなぐ内面は……

ⓐ**「僕」が近づいてきた**。これはこの兄弟にとっては危機に違いない。**餌を盗んだ当の相手が来る**のである。まして彼らの餌箱の中には「僕のと大体同じ型の同じ大きさのゴカイ」がもつれ合っている。これは決定的な証拠となる。

ⓑ**彼等は緊張した**。その時「浮子がピクッと大きく動いた」。魚がかかったのだ。しかし「兄」は釣竿を上げようとしない。何をどんなに問い詰められ責められるか。**あまりの緊張に、釣りどころではなくなっている**のである。

正解の構造
ⓐ怒っているに違いない「僕」が近づいてきたために、
ⓑ極度に緊張し、釣りどころではなくなってしまっている。

○①「ⓐ『僕』が近づいてきたためにⓑ極度に緊張し、釣りどころではなくなっている。」
×②「僕」は助言していない。「言いかけて、途中で止めた」。また「釣りに集中しよう」というのも本文に合わない。「引いてる」のに反応できなかったのだ。
×③「視線を奪われ」が本文に合わない。「かたくなに僕の方を見ない」のである。
×④「敵対心を示すため」は根拠がないし、「僕」は何も言ってはいない。
×⑤「すべてのこと」に「うわの空」になっているわけではない。むしろ「僕」の動向に集中している。だから、浮子の動きにも反応できないのだ。

問3 理由説明　**傍線部B「僕は立ち上がった。餌箱をぶら下げて、ためらわずに兄弟に近づいて行った」とあるが、なぜこのような行動を「僕」はとったのか。**　16

設問の意図 ⓐ「僕」がとった行動の意味と、ⓑその目的はどのようなことか。

アプローチ **ⓐ「僕」の行動の直接の意味と、ⓑその本当の目的を、文脈から読み取る。**

> そしてふと振り返った時、そこにこの間の子供がいたのだ。この前と同じように、兄弟並んで、ぼんやりと海を眺めている。その時僕は、ほとんど無意識に、そして彼等に気付かれないように、自分の餌箱を脇に引き寄せていたのだⓑ。次の瞬間、その自分のやり方が急にあらあらしく僕に反撥してきた。れいのジタバタが始まった。
> 「ふん」
> と僕は思ったⓑ。そんならあの子供たちにⓐ今日はこちらから餌をわけてやる。そんな思いつきがとたんに頭をかすめた。もうどうせ帰るのだから、残りのゴカイは不用なわけだ。ゴカイというやつは、とても条件を良くしないと、翌日まではもたないのだ。
> B僕は立ち上がった。餌箱をぶら下[illegible]ためらわずに兄弟に近づいて行った。
> 跫音を聞いて、兄弟は振り向いた。[illegible]るように二人の表情は突然するどくなった。兄の方は、よりそってきた弟をかばうように、身体を動かして構えた。その[illegible]向きは、僕をたじろがせるほど烈しかった。
> ⓐ「餌をやろうか。え？」
>
> ⓑ→ⓐという因果関係

ⓐ**「そんならあの子供たちに、今日はこちらから餌をわけてやる」**という「思いつき」から「僕」は「ためらわずに兄弟に近づいて行った」。そして実際に、警戒心をあらわにした「子供たち」に「餌をやろうか。え？」と話しかけたのだ。

ⓑところで「**そんなら**＝それなら」は何を受けているのだろう。その直前には「その自分のやり方（＝子供たちの姿を見て、餌箱を脇に引き寄せたこと）が急にあらあらしく僕に反撥してきた。れいのジタバタが始まった」とある。この「ジタバタ」は**自分自身の行為に対する反撥**である。終盤では「現実の摩擦を避けるために、僕の打った手が、逆に僕を惨めにした」と説明されている。

正解の構造
ⓐ餌を盗んだ子供たちに逆に餌を分け与えることで、
ⓑ自分自身の行為に対する反撥や惨めになった気分を紛らわそうとしたから。

○⑤「**ⓐ餌を盗んだ子供たちに逆に餌を譲ってやることが、ⓑ自身に対するいらだちややり切れなさの解消になると思ったから。**」
×①「互いのあいだにあるわだかまり」の「解消」は根拠がない。自分の問題である。
×②「ゴカイを無駄にせず」は表面上。「生活に苦労している」は後に思うこと。
×③「子供たちに」「罪を自覚させ」「自分の寛容さをも示す」はいずれも根拠がない。自分自身の「バタバタ」解消のために「そんなら」と言っている。
×④「彼らを疑」ったことに対する「償い」ではなく、自分自身の問題。

問4 心情説明　**傍線部C「いらん」と傍線部D「いらないぞ」とあるが、ここにあらわれている「兄弟」の心情はどのようなものだと考えられるか。**　17

設問の意図 このときの「兄」と「弟」の内面の違いはどのようなものか。

アプローチ **前後の描写から、ⓐ「兄」の内面とⓑ「弟」の内面を比較しつつ類推する。**

> 子供の傍の餌箱は空で、底には小量の泥がかさかさに乾いている。兄は警戒の色をますます深め、じっと僕をにらんでいる。ⓑ弟の方の顔はしだいにくずれて、今にも泣き出しそうな顔になった。しかし泣き出しはしなかった。眼をキラキラさせて、脣を噛みしめている。僕はしだいに自分のこんなバカな[illegible]付きを後悔し始めていた。しかしこのままでは(イ)ひっこみがつかない。
> 僕は少しいらだって来た。
> 「餌、欲しくないのか」
> 笑って見せようとしたが、笑い顔にならなかった[illegible]も知れない。僕は餌箱を眼の前につき出そうとした。その時突然ⓐ兄の方がいやにはっきりと答えた。
> 「いらん！」
> そうか、と僕は言い、しか[illegible]もう帰るし、どうせ餌は捨てるんだから、要るのなら置いてゆくよ、とまだ言い終わらないうちに、
> ⓐC「いらん」
> とも一度兄が言ったⓑ。ほとんど同時に弟が脣を曲げるようにして、
> ⓑD「いらないぞ」
> とつけ加えたⓐ。兄の声は、前ほど(ウ)つっけんどんではなく、やや弱々しくひびいた。そうか、としかし僕もすこしむっとした。しばらく視線を合わせていたが、僕は突き出した餌箱の恰好がつかず、そのままゴカイを放り出すようにして海面に捨てたⓐ。三人の視線は一度にその方に動いた。
>
> 兄は心情に変化がある
> 弟の心情
> 兄と弟との対比に注目
> 視線の動きに注目

ⓐつき出された餌箱に対する「兄」の「いらん」という答えは、「いやにはっきりと」した調子から、「やや弱々しくひび」く**微妙な調子**に変化した。最初は言葉通りの拒絶だ、敵に違いない男が相手なのだ。しかし「餌箱は空」だという現実があるし、相手は重ねて「要るのなら置いてゆくよ」と言ってくれようとしてもいる。餌が放り出されたとき「三人の視線は一度にその方に動いた」ことも考えると、二度目の「いらん」には**捨てられる餌を惜しむ心理**も働いているだろう。

ⓑそれに対して「弟」は「泣き出しそう」（46行目）になりながらも「兄」の「いらん」と言うのに同調して、**けなげに**「いらないぞ」と言っている。

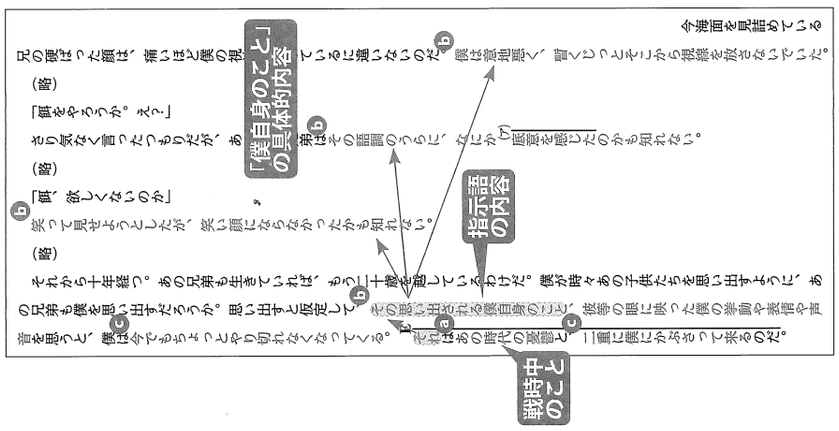
正解の構造
ⓑ「弟」はたんに「兄」の言葉に同調して「僕」への敵対心をあらわにしている。
ⓐ「兄」は餌を拒みながら、それを要する自らの現実を思わずにいられない。

○④「**ⓑ『弟』はただけなげに『僕』への敵対心をあらわにしているが、ⓐ『兄』は『僕』を警戒しながらも、自分たちに餌のない現実を顧みずにはいられないようだ。**」
×①「兄」が「警戒心をゆるめ、和解の可能性を考えている」は根拠がない。「兄」の悩みは、「僕」とのいさかいではなく、「餌」であろう。
×②「兄」が「僕」を「おそれるべき相手ではないことに気付き」という内容は、根拠がない。「兄」の警戒心はまだ続いている。
×③「いわれない疑い」は誤り。また「執拗な追及」ではなく、餌を譲る話だ。
×⑤「兄」の「いらん」が「弱々しい」のは、「気が弱い」せいではない。「餌」のためだ。

問5 内容説明 傍線部E「それはあの時代の憂鬱と、二重に僕にかぶさって来るのだ」とあるが、それはどういうことか。 18

設問の意図 ⓐ「あの時代の憂鬱」の中で、ⓑ「僕」自身はどのようになっていたか。

アプローチ ⓐ「あの時代の憂鬱」と、ⓑその当時の「僕」のありよう、そしてⓒそれらが「二重に」「かぶさって来る」という意味合いを読み取る。



正解の構造

ⓐ戦争中の重く沈んだ雰囲気
ⓑ「兄弟」から見た「僕」の意地悪く和やかでない姿と
ⓒⓐⓑが重なり合って、今でもやり切れない思いになってくる。

○③「ⓐ戦争中の重く沈んだ雰囲気と、ⓑその中で屈折したひとりぼっちのすさんでいたにちがいない自分の姿とがⓒ重なって想起され、今でも時にたえがたい思いにとらわれてしまうということ。」

×①「貧しい子供である」は帰り道での感傷的な想像。「知りながら」ではない。

×②「その後の彼らの運命」は不明。またⓑがない。当時の自分を顧みているのだ。

×④「戦争というものの恐ろしさ」は直接には本文にない。「兄弟」の目に映った自分自身の姿に対してやり切れなさを感じているのだ。

×⑤「子供たちの姿」は想起されていない。「僕自身」を「思う」のだ。

問6 表現説明 この文章における表現の特徴についての説明として適当なもの。 19・20

アプローチ 本文に見られる表現上の工夫がどのような効果をあげているか押さえる。

① 過去にあったささやかな主エソードではあるが、出来事を見る「僕」と「子供等」の視点を交錯させることで、奥行のある物語が作り出されている。 ×
② 戦後に戦争中の出来事を回想するという形式の中で、かつての「僕」も回顧され、いまだにぬぐい去れないやり切れない思いが重層に語られている。 ○
③ 音のない風景と人間の姿のみを描写することで、「僕」が過ぎ去った日の情景を夢のように思い起こしているかのような印象を作っている。 ×
④ 「ウロチョロ」「とクッ」「ジタバタ」「ハッキリ」など、副詞やその一部にカタカナを用いて、そこにあらわれる登場人物に素朴感を与えている。 ×
⑤ 実際に発せられた言葉と、心のうちに留められた言葉とが、「 」の有無で区別されることで、外的世界と内的世界が重層的に描写されている。 ×
⑥ 海中に棲むられたコカイの姿と、そこに生じた色彩のコントラストを写実的に描写することで、エソードのしめくくりを鮮やかに印象づけている。 ○

○②冒頭と最終段落に回想であることが示され、当時の語り手自身の、すさんだありようが顧みられている。

○⑥戦時中の憂鬱な気分の中で起こった、貧相な兄弟との摩擦において露呈した自分自身のやり切れない記憶が、「あの縁の滝に紅く伸縮するいくたのコカイの姿」を「美しい終止符」と位置づけることで「僅かに救われている」とある。

×①「僕」と「子供等」の視点は「交錯」していない。一貫して「僕」の視点から見られ語られている。

×③「音のない風景と人間の姿のみを描写する」が本文と一致しない。少なくとも「僕」と「子供等」との会話がある。また「夢」のようであるとは言えまい。むしろ現場のリアルな描写が続く。

×④カタカナで書かれた副詞と登場人物の存在感に因果関係は認められない。「ジタバタ」など、とらえがたい内面の表現でもある。

×⑤「そら、引いてるじゃないか」(23行目)「バカだな。しっかりしろ」(26行目)「ふん」(35行目)などが、声にならなかった言葉である。「 」による区別はない。

解答

設問	問1			問2	問3	問4	問5	問6
解答番号	21	22	23	24	25	26	27	28
正解	②	③	③	①	②	④	⑤	③
配点	5	5	5	6	7	7	8	7
難易度	★	★	★★	★★	★★	★★	★★	★★

出典・作者

『住吉物語』は、鎌倉時代初期の擬古物語。作者未詳。平安時代前期に同名の作品があったようですが、それは失われ、現存するのはその改作本とされています。実母を失った姫君が、継母に妨害されながらも少将に愛され、やがて幸福な生活をするという内容で、『落窪物語』と並ぶ代表的な継子いじめの物語です。センター試験では、二〇一二年の追試で出題されたことがあります。

本文読解 少将と中の君・少将と姫君の和歌の贈答の内容を読み取る

本文は、姫君たちが嵯峨野に野遊びに出かけることを知った少将が、先回りをして姫君の姿をのぞき見した後、和歌の贈答をする、という話です。

1段落。中の君の誘いで、**姫君たちが嵯峨野に出かける**ことになりました。姫君が長女、中の君が次女、三の君が三女の三姉妹。中の君の言葉に「忍びつつ」とあるように、人目を避けたプライベートのお出かけです。

2段落。**聞きつけた少将が先回りして、隠れてのぞき見**をします。普通は人前に姿を見せない高貴な女性も、野遊びなら車から降りて遊ぶはずです。少将にとっては、かねて心ひかれていた姫君の姿を見るチャンスです。そんなこととは知らない三姉妹の方は、女房たちに続いて、中の君、三の君と、順次車から降りてきます。

3段落。なかなか車から降りない姫君も、侍従に促されてようやく降りてきました。その姿は絵にも描けない愛らしさ。**少将は「世の中にはこんなにすばらしい人もいたのか」と感動**します。少将はこの時はじめて姫君の姿を見たのです。

4段落。**少将が歌を詠みかけ、中の君が返歌**をします（→〔設問の解法〕**問3**）。少将の思いの人は姫君ですから、姫君に詠みかけた歌であるはずですが、姫君と中の君は譲り合い（→〔設問の解法〕**問4**）、中の君が返歌をしたのです。本文を通じて、中の君は一貫して行動をリードする役割を与えられています。**不本意な少将は再び歌を詠みかけ**（→**この文に注目！**）、今度は「姫君に」と指名します。**姫君は初めは返歌をしようとしませんでしたが、催促されて返歌**をします（→〔設問の解法〕**問5**）。姿を見られて恨めしいので今日はこのまま帰ろうという主旨の歌で、これは少将の誘いをきっぱり拒絶する内容です。しかし、女からの返歌はいつもこうして男の誘いに反発する内容となるのが定石なので、この内容に少将が落胆したとは考えられません。むしろ、返歌を受けたということ自体が重要で、少将はそれを喜んだはずです。姫君との初めての歌の贈答なのです。少将は思いを抑えきれず、近づいて話しかけますが、それに応じたのはまたしても中の君でした。そうして**中の君と会話をしながらも、姫君と話したいという思い**が、少将のそぶりに表れていたということです（→〔設問の解法〕**問6**）。

この文に注目！

22 **【君と我野辺の小松をよそに見て引かでや今日は立ち帰るべき】**

表面的には、小松を引いて遊ぶこともないまま帰ることになるのか、という意味ですが、「小松」が姫君を暗示することで、あなたの手を引いて遊ぶこともないまま帰ることになるのか、と、**姫君を親密な関係に誘う内容**にもなっています。少将はかねて姫君に心を寄せているのですから、これは少将の本気の訴えです。しかし当時は、たとえ恋愛関係にはない場合でも、恋愛のムードで装った歌の贈答を楽しむことがありましたから、この歌も、そうした**造詣的な挨拶の歌**として見ても不自然ではありません。中の君や三の君にはそのように聞こえたはずです。三の君の婿である少将が、妻の前で他の女性に露骨に求愛したとは映らなかったのです。

重要語句（〔設問の解法〕で取り上げないもの）

1 **【忍ぶ】**［動バ四］①がまんする。②人目を避ける。本文では②。
10 **【とみなり】**［形動ナリ］①急だ。②（「とみに」で）すぐに。本文では②。
12 **【あでたし】**［形ク］すばらしい。立派だ。
22 **【よそなり】**［形動ナリ］無縁だ。

センター試験攻略のヒント3

文章を正しく理解するには、単に訳していくだけではダメです。**どんな場面かということを具体的にイメージして読む**ことが大切です。手始めに、どこに誰がいるか、どこに何があるか、人や物の配置を具体的に確かめながら読んでみましょう。

設問の解法

問1 (解釈) 傍線部(ア)〜(ウ)の解釈 21〜23

設問の意図 重要古語・語法を押さえているか。

(ア) アプローチ 「あらまほしき」の訳をチェックします。

「あらまほし」(形容詞)→「理想的だ・好ましい」

「あらまほしき」はシク活用形容詞「あらまほし」の連体形。もともとは動詞「あり」の未然形に願望の助動詞「まほし」が付いたもので、原義は「そうありたい」。それが熟して「理想的だ・好ましい」という意味の形容詞になりました。「ほど」は名詞でさまざまな意味がありますが、ここは「様子・具合」を表しています。「なり」は断定の助動詞。これを押さえて傍線部(ア)を直訳すると、「好ましい様子である」。

- ×①度を越えてみっともない
- ○②節度があって好ましい
- ×③年相応でかわいらしい
- ×④我を忘れていて嘆かわしい
- ×⑤体裁をたもって奥ゆかしい

正解の確認

どの選択肢も文脈に合わせて意訳していますが、「あらまほし」の語義を知っていると容易に正解は②だと分かります。

(イ) アプローチ 「うちそばみ」と「おはする」の訳をチェックします。

「そばむ(傍む)」(動詞)→「横を向く」

「うちそばみ」の「うち」は接頭語です。「そばみ」はマ行四段活用動詞「そばむ」の連用形。「おはする」はサ行変格活用動詞「おはす」の連体形。『おはす』は敬語で、(1)「あり」「行く」「来」の尊敬、(2)尊敬の補助動詞の意味があります。(1)でも(2)でも基本的な訳語は「いらっしゃる」。

- ×①涙を流していらっしゃるので
- ×②そ知らぬお顔をしているので
- ○③横を向いていらっしゃるので
- ×④まっ赤に顔を染めているので
- ×⑤呆然としていらっしゃるので

正解の確認

「(うち)そばむ」の語義を知っていると、それだけで正解は③だと分かります。「おはする」の解釈のチェックでは、②と④しか落とすことができませんでした。ただし、解釈問題で傍線部中に敬語があるときは、その解釈が正しくなされているか、要チェックです。

(ウ) アプローチ 「いつかは」の「かは」の用法をチェックします。

「かは」(係助詞)→〈反語〉「か(いや、…ない)」

「いつかは」の『かは』は、疑問・反語を表す係助詞「か」に強意の係助詞「は」が付いて一語化した係助詞。強い疑問を表すので、多くは反語で使われます。ここも「反語」の意味。「いつかは」で「いつ…か、(いや…ない)」という意味を表しています。結びの語が省略されているので、「…」の部分は文脈から補います。傍線部(ウ)の直前の文から結びの語は「降りつる」だと分かります。「(車から)いつ降りたことか(いや、降りていない)」ということです。

選択肢を見ると、反語で訳していない①②⑤は×。③は「いつたい」とあるので強い疑問、つまり反語になっていて○。④は「誰が」が少し気になるので△です。

正解の確認

まずは③を傍線部(ウ)に代入してみて、文脈に合うかどうかを確認します。

〈車からは少将殿の奥方お一方だけが、降りなさった。③ほかの人はいつたいいつ降りたことでしょうか、いや、降りていません。いかにも知ったかぶった顔で、おっしゃるものだなあ〉→○です。正解は③ですが、念のため、④も代入してみます。

〈車からは少将殿の奥方お一方だけが、降りなさった。④私以外にいつたい誰がいつ降りたのでしょうか。いかにも知ったかぶった顔で、おっしゃるものだなあ〉→×です。

問2 (主体判定) 波線部a〜dの主語として、正しい組合せのものを一つ選ぶ 24

設問の意図 波線部を正しく解釈しているか。文脈を把握できているか。

アプローチ 波線部を正しく解釈した上で、前後の文脈を押さえます。

aは、波線部のすぐ上に「少将」とあるので、ついた主語は「少将」と思うかもしれません。しかし、「少将」がかかっていく述語は「隠れ見る」です。「知らず」の主語はすぐ下の「女房ども」。「〈少将が〉よく隠れ見るのを(女房どもは)知らず、女房どもが…」という文の構造です。

bは、『見え』の語義がポイント。「見え」はヤ行下二段活用動詞「見ゆ」連用形。「見ゆ」は、「見る」(＝「目にする」)ことではなく「目に映る」ことです。つまり、「あ・る・も・の・が」ある人の目に映る」という意味です。したがって、主語は「あるもの」になります。この「見え」は「姫君が少将の目に映る」という意味なので、主語は「姫君」になります。

cは、波線部の前後の文脈から考えます。

〈大きなる松の下に隠れる給へるを、この姫君もc見つけ給ひて、顔うちあかめて、急ぎ車に乗り給へるにつけても〉

注意したい語に傍点を付けてみました。すると、「大きなる松の下に隠れる給へる」は助詞「を」が付いているので、波線部の目的語であることが分かります。「大きなる松の下に隠れる給へる」のは「少将」ですから、「少将」は主語ではありません。波線部のすぐ上に「この姫君しも」とあります。『姫君』が主語です。傍点は、波線部の助詞『て』、さらにその下の「て」にも付けてみました。この助詞に注目すると、cの主語と「顔うちあかめ(て)」と「急ぎ車に乗り給へる」の主語が同じであることが分かります。

dは、まず『聞こえ』に注目します。「聞こえ」はヤ行下二段動詞「聞こゆ」の連用形。「聞こゆ」はさまざまな意味を表しますが、ここでは「言ふ」の謙譲語。つまり、dのすぐ上の「このたびは、姫君に」は会話の内容です。選択肢はdの主語を「少将」か「中の君」のどちらかとしています。dには「給へ」と尊敬語もあります。しかし、そこからただちに主語は「少将」と決めるわけにはいきません。「中の君、降り給へり」と中の君にも尊敬語は使われているからです。文脈から決めます。Aの歌は少将の歌です。それを受けて中の君はBの歌を詠みました。すると、少将は「君と我…」の歌を詠んで、『このたびは、姫君に』とd聞こえ給へども」となっています。主語は『少将』です。

正解の確認

アプローチは解説の便宜上aから順にしていきましたが、実際にはどこからでもかまいません。この問いの場合、c・dが比較的分かりやすく、選択肢も、c・dを正しく判定できると、正解が出るように作られています。正解は①です。

問3 (和歌の説明) A・Bの歌に関する説明として適当でないものを一つ選ぶ 25

設問の意図 基本的な和歌技法を押さえているか。

アプローチ 和歌技法に関する説明をチェックします。

設問は「適当でないもの」を求めています。適当なものを、なぜ適当なのか考えてもしかたがないので、正解のどこが適当でないのかを考えてみましょう。正解は②です。

- ②Aの「春霞」は「たち」、Bの「片岡の」は「まつ」の枕詞であり、Aは句切れなく体言止めされているが、Bは二句と四句で切れている。

『枕詞』『句切れ』『体言止め』のどれかの知識があれば、正解が得られます。

『枕詞』は、ある語を導くための五音節の言葉です。意味はないのですが、呪文を唱えることあることが決まって起こるように、枕詞を唱えるとある言葉が決まって導かれます。唱える枕詞と導かれる言葉の関係は固定的ですから、暗記するしかありません。「春霞」は枕詞として「立つ」を導くこともありますが、ここは実景なので枕詞ではありません。「片岡の」も枕詞ではありません。

『句切れ』は、散文だったら句点(。)を打つ箇所を言います。和歌は「5・7・5・7・7」と五つの句に分けることができますが、この句のどこかで句点が打てるならば、歌はそこで切れていると言えます。たとえば「5・7・5。7・7」ならば「三句切れ」、「5・7・5・7・7。」や句点が打てない歌は「句切れなし」ということになります。Aの歌もBの歌も、それぞれ「今日見つるかな。」「ことぞくやしき。」なので「句切れなし」の歌です。

『体言止め』は、最後の五句目を名詞で言い切っている歌を言います。Aの歌の最後の語は「かな」です。「かな」は詠嘆の終助詞であり、名詞ではありません。

正解の確認

センター試験ではよく和歌の問題が出されます。和歌の問題は難題が多いのですが、この問いのように選択肢の中に和歌の技法に関する説明があるときは、まずチェックしましょう。それで答えが出たり、出ないまでも選択肢を絞ることができます。正解は②です。

問4 (内容説明) 傍線部X『それ』と聞こゆれば、『そなたにこそ』とのたまへば、たがひに言ひかはし給ひて」の内容の説明 26

設問の意図 傍線部をきちんと解釈した上で内容を把握しているか。

アプローチ 「たがひに言ひかはし給ひて」の解釈をチェックします。

傍線部Xの解釈のポイントは「たがひに言ひかはし給ひて」の『言ひかはし』の語義です。「言ひかはし」はサ行四段動詞「言ひかはす」の連用形。「かはす」は漢字をあてると「交はす」ですから、「言ひかはす」で『言葉を交わす』こと、『言い合う』『話し合う』という意味です。選択肢を見てみると、どれも「中の君、言う」→「姫君、言う」の形になっていて、「たがひに言ひかは」すことを説明しているような気がします。しかし、これは傍線部の『それ』と聞こゆれば、『そなたにこそ』とのたまへば、」の説明で「たがひに言ひかはし給ひて」の説明ではありません。そこで、各選択肢の後半に注目します。

- ×①…中の君が歌を返したということ。
- ×②…中の君が歌を返したということ。
- ×③…なかなか収拾がつかなかったということ。
- ○④…どちらが返歌するのか言い合ったということ。
- ×⑤…どちらも歌を返す気がないということ。

正解の確認

「言ひかはす」を正しく解釈して、具体的に説明しているのは④だけです。①②はBの歌のあとの「とあれば」の「あれ」の説明です。③は「言ひかはす」の語義を外れて、文脈だけをたよりに主観的な説明をしています。⑤は、「言ひかはす」の語義に外れているだけでなく、中の君は「たがひに言ひかはし」たあとBの歌を返しているのですから、文脈にも合いません。**正解は④**です。

問5 (心情説明) **Cの和歌を詠むにいたる姫君の心情の説明** 27

設問の意図 心情にかかわる重要古語を押さえているか。

アプローチ **姫君の心情を述べた箇所を本文から探します。**

心情説明の設問では、問われている人物の心情を述べた文を正しく解釈できれば、正解を求めることは難しくありません。その文をもとにさらに深くその人物の内面に入り込んで考える必要はないのです。この問いは、傍線が引かれていないので、まず姫君の心情を述べた箇所を本文から探す必要があります。ただし、設問文に「Cの和歌を詠むにいたる姫君の心情」とありますから、まずはCの和歌の前の文に注目すればよいわけです。具体的には、23〜24行目の**「よしなきありきをして、見えつる事をかなしくおぼして、〜御返事なくても、むげに知らぬやうにおぼえて」**の文に注目します。この文には、

(1)「よしなきありきをして、見えつる事をかなしくおぼして」
(2)「御返事なくても、むげに知らぬやうにおぼえて」

と姫君の心情が二つ述べられています。そこでこの二つを解釈してみます。

(1)**「(姫君は) つまらない外出をして、(少将に) 見られたことを悲しくお思いになって」**
(2)**「お返事がないのも、あまりにそっけないように思われて」**

×①こっそりと先回りをして少将が隠れ見ていたことを悔しく思ったが、歌を返さなくては待ち伏せに気づかなかったように思われると気を取り直して歌を詠んだ。

×②する必要もない先回りをして少将が隠れ見ていたことを情けなく思ったが、歌を返さないのもひどく風情を解さないように思われて歌を詠んだ。

×③不用意に車から降りて少将に見られてしまったことをつらく思ったが、歌を返さなくては歌を知らないと誤解されると思い返して歌を詠んだ。

×④たわいない野遊びをして少将に見られたこと(「よしなき」の解釈が「たわいない」でいいのか？なので△にしました)を悲しく思ったが、歌を返さないのもまったく他人行儀のように思われて歌を詠んだ。

○⑤つまらない野遊びをして少将に見られたことを悲しく思ったが、歌を返さないのもあまりにそっけない態度に思われて歌を詠んだ。

正解の確認

(1)(2)を正しく解釈して記されているのは⑤だけです。⑤が正解です。

問6 (内容説明) **傍線部Y「けしきばみ給ひにけり」の内容の説明** 28

設問の意図 傍線部を正確に解釈した上で、その言わんとする内容を文脈から正しく把握しているか。

アプローチ **「けしきばみ」の解釈をチェックします。**

「けしきばむ」(動詞)→「心の中の思いが顔色や態度にそれとなく現れる」

「けしきばみ」はマ行四段活用動詞「けしきばむ」の連用形。「けしき」は漢字をあてると「気色」。「目に見える様子」を言います。「ばむ」は「黄ばむ」「汗ばむ」の「ばむ」です。

また、選択肢を見比べると、傍線部Yの主語を「中の君」と取るのか(①②)、「少将」と取るのか(③④⑤)割れていることが分かります。Yは、「少将、うち笑ひて、…」以下の文を受けているので、**主語は「少将」**だと分かります。これもチェックです。

×①少将が、中の君に冗談を言っても、本当は姫君とことばを交わしたいだけなのだという不満が、自然と中の君の顔に浮かび出ていたということ。

×②少将が、中の君に冗談を言っても、実際には姫君を笑わせたいだけと中の君は思って、むっとした怒りが中の君の表情に現れたということ。(↑△なのは①③と比べて「ばむ」のニュアンスが反映されていないからです。)

○**③少将が、中の君に冗談を言うのも、実のところ姫君とことばを交わしたいからだということが、少将のそぶりにそれとなく現れていたということ。**

×④少将が、中の君に冗談を言うのも、できれば姫君との間を取り持ってもらいたいからだということが、少将の意気込む姿によく出ていたということ。(↑×なのは「けしきだつ」の語義で解釈しているからです。)

×⑤少将が、中の君に冗談を言うのも、ただ姫君に笑ってもらいたいからなのだという少将の魂胆が、姫君にはなにとはなしに感じられたということ。(↑△なのは、「感じられた」に?をもったからです。)

正解の確認

「けしきばむ」の語義を正確に解釈し、Yの主語を正しく把握している③が正解です。

3 漢文 『晏子春秋』

本文難易度 ☆☆／本誌P94〜100

解答

設問	問1	問2	問3	問4	問5	問6
解答番号	29	30	31	32	33	34	35	36
正解	④	③	②	③	①	④	⑤	③
配点	4	4	7	6	6	7	8	8
難易度	★	★★	★	★	★★	★	★	★★

出典・作者

『晏子春秋』。春秋時代の斉の国の宰相であった晏嬰の言行録で、戦国時代に編纂されたものと考えられています。

『晏子春秋』は、センター試験だけにかぎらず、一般的にしばしば入試問題の出典として取り上げられる書です。

本文読解 **喩え話を上げたうえで国家について論じる、という構成を押さえる**

本文は社殿に巣くう鼠と、酒屋が飼っている獰猛な犬の話を用いながら、国家に害を為す臣下について論じた文章です。本文は三段落に分かれていますが、段落ごとの内容をまとめてみると、

1 社殿に巣くう鼠は、駆除しようとすると社殿そのものを壊しかねず、駆除が難しい〈喩え〉

⇔

「左右」は君主の恩寵を被っているため、国に害を及ぼすものであっても追い払うのは難しい

2 獰猛な犬のいる酒屋では、犬が客に噛みつくので、客がよってこない〈喩え〉

⇔

「用レ事者」は、君主に仕えようとする賢人を追い払ってしまう

3 「左右」や「用レ事者」がいると、君主は正しい情報を得られず、国は危うくなる

という構成になっています。

「鼠」や「狗」の話は、あくまで「左右」「用レ事者」について論じるための喩えとして用いられており、**本文の意図は、3の内容からわかるように、「左右」や「用レ事者」が君主や国にとって害をなすものであることを示すため**であることに注意しましょう。

キーワード

【夫】「そもそも・いったい・だいたい」などと訳し、新たに議論を提示したり、文を起こす際に用いられます。本文では**1**段落、**2**段落それぞれの途中にも「夫」が使われており、喩えと実際に述べたい内容を区切る目安となっています。

3 **【人主】**「君主」のことです。「人君」などと表現する場合もあります。

3 **【左右】**①「君主の側仕えをする臣下・側近」、②「周辺・周囲」などの意味で用いられます。本文では「人主左右」という表現から、①「君主の側近」の意味であることが分かります。

9 **【万乗之主】**「大国の君主」の意味です。「万乗」とは、「一万台の兵車」のことですが、通常は「兵車を一万台所有できる国」のことを言い、「万乗之君」なども同じように「大国の君主」を表します。時には「千乗」(兵車を千台所有できる国)も、「大国」を示す場合もあります。また逆に、「百乗」(兵車を百台所有できる国)と言えば、一般に「小国」を指します。

誤読に注意

4 **【腹而有レ之】**この文の主語は、「左右」が仕えている「君主」です。

7 **【狗迎而噬レ之】**「迎」は「待ちかまえる」という意味で捉えると分かりやすくなります。また、ここの「之」は酒を買いに来た客を指します。

9 **【而用レ事者迎而齕レ之】**「之」は「有二道術一之士」を指しています。

過去問リンク

問2・4・5 (理由を問う問題)

理由説明の問題は頻出です。行為の理由、結論の理由などをはじめとし、中には理由説明の形態をしていても、実質は段落全体の内容を尋ねていたり、趣旨を尋ねていたりする場合もあります。ただ、**理由説明の問題の場合は、その理由に相当する箇所を見抜き、その箇所を現代語訳した上で、内容を正確に捉える**ことが求められています。

設問の解法

問1 (語の意味) 傍線部(1)「百姓」・(2)「用レ事者」の意味は何か 29・30

設問の意図 重要語「百姓」の意味と、「用レ事者」の文中での意味が把握できているかどうか。

(1) アプローチ 重要語「百姓」の意味を確認します。

「百姓」＝「ひゃくせい」と読み、「民衆・人民」の意味。

(2) アプローチ 「用レ事者」の意味を、文脈から確認します。

「用レ事者是也」以降の内容に着目しましょう。「用レ事者是也」に続く、「有二道術一之士、欲レ干二万乗之主一。而用レ事者迎而�axレ之」は、「道徳や学問のある賢人は、大国の君主に仕えようと望んでいます。(しかし)『用レ事者』が待ちかまえていてその賢人に嚙みつくのです」と訳せます。つまり「有二道術一之士」が、君主によって登用される前に、「用レ事者」が排除してしまう、と言っています。この内容から、「用レ事者」とは、**君主そのものではないものの、人物の登用についての、ある程度の権限を有している者**と考えられます。この内容に合致する選択肢は、③しかありません。

正解の確認

(1)「百姓」は必須の重要語。正解は④「人民」です。

(2)は①②⑤が文脈に合わないことは明らかでしょうが、④がやや紛らわしいかもしれません。ですが、「君主の身の回りの世話をする者」では、君主によからぬことを吹き込むことはできるかもしれませんが、「賢人に嚙みつく」、つまり直接的に「賢人を排除する」という行動に出るとは考えにくいといえます。正解は③『政治の実権を握っている者』です。

問2 (理由説明) 傍線部A「此鼠所二以不一レ可レ得レ殺者一、以二社故一也」とあるが、社殿の鼠はなぜ殺すことができないのか 31

設問の意図 冒頭から傍線部Aまでの内容を的確に捉えられているかどうか。

アプローチ 傍線部Aが、冒頭から傍線部Aの直前までを踏まえた内容になっていることに着目し、その内容を的確に捉えます。

傍線部Aは、「このように鼠を殺すことができない理由は、神殿だからなのです」と訳せます。つまり「鼠が社殿に住みついているから殺すことができない」ということになります。では、なぜ、社殿に住みついていると殺せないというのでしょうか。それは、冒頭から傍線部Aの直前までに書かれています。冒頭から傍線部Aの直前までを訳してみると、「そもそも神殿は木をたばねそれに壁土を塗って造ります。鼠はそこで神殿に行き住みついて頼りとするのです。鼠を煙でいぶし出そうとすれば、神殿の木を焼いてしまう恐れがありますし、鼠(を溺れさせるため)に水を注ごうとすれば、神殿の壁土を崩してしまう恐れがあります」となります。

冒頭から傍線部Aの直前までの内容を整理すると、次の二点にまとめられます。

正解の構造

ⓐ「鼠を煙でいぶし出そうとすると、社殿の木を焼いてしまうかもしれない」

ⓑ「鼠を水で溺れさせようとすると、社殿の壁土を崩してしまうかもしれない」

正解の確認

×①鼠を煙でいぶし出そうとすると鼠は社殿の木をかじり出し(↑ⓐの内容として不適当)、水で溺れさせようとすると鼠が壁に穴を開けて(↑ⓑの内容として不適当)、社殿の壁土を崩してしまう恐れがあるから。

○②**鼠を煙でいぶし出そうとすると社殿の木を焼いてしまう恐れがあり**(↑ⓐの内容として正しい)、**水で溺れさせようと水を注ぎ込めば、社殿の壁土を崩してしまう恐れがある**(↑ⓑの内容として正しい)**から。**

×③鼠を煙でいぶし出そうにも、社殿の木の奥に逃げ込んでしまう(↑ⓐの内容として不適当)し、水で溺れさせようにも、壁の上に逃げる(↑ⓑの内容として不適当)ので、社殿自体を崩してしまう恐れがあるから。

×④鼠を煙でいぶしても、水で溺れさせても、時間が経てばまた鼠は住み着く(↑本文に無い内容)ものであり、さらに社殿の木や壁土を傷めてしまう恐れがある(↑ⓐ、ⓑの内容は一応は出ている)から。

×⑤鼠を煙でいぶし出そうとしても、水で溺れさせようとしても、鼠の根絶に至ることは無く(↑本文に無い内容)、あげくに社殿の木や壁土だけ崩してしまう恐れがある(↑ⓐ、ⓑの内容は一応は出ている)から。

問3 (書き下し文と解釈) 傍線部B「誅レ之則為二人主所一レ案」について、(i)書き下し文・(ii)その解釈 32・33

設問の意図 返り点を施した文を適切に読み、解釈を作ることができるかどうか。

(i) **アプローチ 受身形「為〜所〜」に着目します。**

為〜所—— 為二A所一レBAにBされる〈受身〉

傍線部Bで、「為二人主所一レ案」の箇所に着目しましょう。ここは、「為〜所——」を用いた受身形になっているので、「**人主の案拠する所と為る**」と読まなければなりません。この読み方になっているのは、③だけなので、**正解は③**となります。

(ii) **アプローチ (i)で確定した読み方をもとに、直訳を作ってみます。**

(i)で確定した③「之を誅せんとすれば則ち人主の案拠する所と為り」を直訳すると、「**これを殺そうとすると君主に信頼されていて**」となります。ここで「之」は、選択肢共通で、「悪事を働く側近の臣下」となっていますが、「君主に信頼されている」のが誰なのかは文脈から判断しなくてはなりません。そこで、傍線部Bの直後に「腹而有レ之(彼らをかばってかくまうのです)」とあることに注目しましょう。整理すると、

・悪事を働く側近の臣下を殺そうとする

←

・君主に信頼されている

←

・かばってかくまう

という流れになっています。つまり、「君主に信頼されている」から「かばってかくまう」ということになるのですから、「**君主に信頼されている**」**のは、「悪事を働く側近の臣下**」であり、君主が「かばってかくまう」という結果、殺すことが難しいということであり、「害をなす鼠を殺すことが難しいのと同様に、悪事を為す側近の臣下も殺すことが難しい」という内容を端的に述べた、❶段落末の「此亦国之社鼠也(これもまた国家にとって神殿の鼠と言うべきものなのです)」とも無理なくつながります。

正解の確認

○①→受身の内容も正しく、文脈にも合致します。

×②→「信頼を…裏切る」が、受身の内容として不適当。

×③→「自身は…信頼を得ることはできず」が、受身の内容として不適当。

×④→「自身が君主に信頼される」が受身の内容として不適当。

×⑤→受身の内容は正しいものの、「…場合であり」が文脈に合いません。

問4 (理由説明) 傍線部C「而酒酸不レ售」とあるが、酒はなぜ売れなかったのか 34

設問の意図 傍線部Cの理由を説明しているのが後の「里人」の発言部分であることに気付き、その内容を的確に捉えることができるかどうか。

アプローチ 傍線部直後の「里人」の発言部分に着目します。

後の「里人」の発言部分の最後が、「此酒所二以酸一而不レ售也」となっていることに注目しましょう。この箇所は「これが酒が酸っぱくなっても売れない**理由です**」と訳せます。つまり、「**里人**」**の発言部分そのものが傍線部Cの理由**になっていることが分かります。「里人」は、発言部分の冒頭から「此酒所二以酸一而不レ售也」までで、「あなたが飼っている犬が獰猛で、人が容器を手にして店に入り、あなたの酒を買おうとすると、犬が待ちかまえていて酒を買おうとする人に嚙みつくのです」と言っています。この内容に合致する選択肢を選べば正解にたどり着けます。

正解の確認

×①質の良い酒はすべて君主の側近たちに独占されてしまっている(↑本文に書かれていない内容)から。

×②酒屋にも鼠が住み着いており(↑本文に書かれていない内容)、人々がその酒屋を敬遠しているから。

×③器や目印の旗ばかりに気を遣い、肝心の酒が美味くない(↑「器や目印」にしか気を遣っていない、とは書かれていません)から。

○④**酒屋が飼っている獰猛な犬が、酒を買いに来た客に嚙みつく**(↑「里人」の発言内容と合致)**から。**

×⑤酒を買いに来ても、酒屋の犬にすべて飲まれてしまっている(↑本文に書かれていない内容)から。

問5 (理由説明) 傍線部D「此亦国之猛狗也」とあるが、「用レ事者」はどうして「国之猛狗」だというのか 35

設問の意図 2段落の最後で述べられている「用レ事者」についての内容を的確に捉えられているかどうか。

アプローチ 傍線部Dの前後の内容に着目します。

設問形態は、「どうして」と、理由説明になっていますが、結局は2段落の最後で述べられている、「用レ事者」についての内容を的確に捉えられるかどうかにかかっています。その「用レ事者」についての説明は、「用レ事者是也」の直前に「夫国亦有二猛狗一」とあり、この一文が、「夫(そもそも)」という議論を新たに提示する語から始まっていることから、この「夫国亦有二猛狗一」以降、傍線部D「此亦国之猛狗也」までが一つのまとまった内容であり、「用レ事者」についての説明になってい

ると判断できます。この部分を訳してみると、「そもそも国家にも同様に獰猛な犬と言うべきものがいます。それは『用レ事者』です。道徳や学問のある賢人は、大国の君主に仕えようと望んでいます。しかし『用レ事者』が待ちかまえていてその賢人に噛みつくのです。（ですから）これ（＝『用レ事者』）は国家にとって獰猛な犬なのです」となります。つまり「用レ事者」が、君主に仕えようとする「有二道術一之士」を遠ざけ追い払ってしまうのであり、それは酒屋に酒を買いに来た客に噛みつき追い払う酒屋の獰猛な犬と何ら変わりはない、ということなのです。

正解の確認

×①大国の君主に重用されているのをいいことに、×「用レ事者」は君主に諫言しようとする賢者たちを遠ざけてしまう（↑「賢者」は「諫言しようとする」ことが目的ではありません）から。

×②在野の賢者が大国の君主に目通りを願ってやって来ると、×「用レ事者」が賢者を捕縛し罪人として罰してしまう（↑「賢者」を追い払うのであり、「捕縛し罪人として罰する」のではありません）から。

×③大国の君主は「用レ事者」を信用するあまり、×国政についてはすべて「用レ事者」で用が足りると思い込んでいる（↑「賢者」に対する態度について触れていません）から。

×④在野の賢者を目の敵にしている×「用レ事者」は、賢者ではなく愚者を大国の君主に推挙し国政を誤らせてしまう（↑「愚者を君主に推挙する」とは書かれていません）から。

○⑤**大国の君主に仕えようとする賢者を、「用レ事者」が待ちかまえて追い払ってしまい、君主に過ぎせようとしない**（↑2段落末の当該箇所の内容として適当）**から。**

問6（本文の構成）**本文の構成はどのようになっているか**

36

〈設問の意図〉本文の構成を的確に捉えられているかどうか。

〈アプローチ〉**問題文全体の趣旨と内容の展開を的確に捉えます。**

問題文の内容は次のように展開しています。

1段落

・社殿に巣くう鼠は簡単には除去できない。

←

・「左右」は、社殿の鼠のようなもので、害をもたらすが、排除できない。

2段落

・獰猛な犬を飼う酒屋では、犬が客に噛みつくので、客は酒を買いに来ない。

←

・「用レ事者」は、君主に仕えようとする賢者を排斥するので、酒屋の獰猛な犬と変わらない。

3段落

・「左右」と「用レ事者」のために君主が耳目をふさがれているようでは、国家は危険を免れない。

つまり、**最終的に、国家についての問題点について論じている**ことになります。

正解の確認

×①△「社殿」や酒屋を現在の国家の置かれた状況の喩えとして用い（↑国家の状況の喩えと言えなくはないので△）、×人民が最も望んでいるのは、飢えや凍えの不安から解放してくれる優れた君主ではないか（↑本文に書かれていない内容であり、趣旨としてもふさわしくありません）と推論している。

×②「有二道術一之士」がどれほど国家にとって有用であるかを、×「左右」「用レ事者」との対比から論じ（↑「有二道術一之士」と「左右」「用レ事者」を対比的に論じてはいません）、×「有二道術一之士」がいない場合に国力が衰微する（↑本文に直接は述べられていない内容）ことを危惧している。

○③**「国」の抱える問題点について、「社鼠」「猛狗」などを「左右」「用レ事者」の喩えとして挙げ**（↑1段落、2段落の内容のまとめとして適当）、**「左右」「用レ事者」を排斥する必要性**（↑直接的には書かれていませんが、趣旨から導かれる内容として妥当）**をわかりやすく伝えようとしている。**

×④×「社鼠」を無能な臣下、「猛狗」を有能だが強欲な臣下の比喩として用い（↑比喩の捉え方が誤り）、どちらも国家にとっては害悪をなす者である（↑趣旨をまとめたものとしては適当）ことを論理的に説明し理解を求めようとしている。

×⑤×「社殿」にとっては、いずれは「有二道術一之士」が必要になることを酒屋の例で説明（↑1段落と2段落の内容が混在している上、内容としても誤り）し、それが国家では「左右」や「用レ事者」に当たる（↑「左右」「用レ事者」が国力にとって必要ということで、趣旨と正反対の結論になります）ことを暗に論そうとしている。

4 評論 加藤周一 『日本文化における時間と空間』

本文難易度☆☆／本誌P102〜109

解答

設問	問1					問2	問3	問4	問5	問6(i)	問6(ii)
解答番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
正解	②	⑤	④	③	③	④	⑤	①	③	②	④
配点	2	2	2	2	2	7	7	8	8	5	5
難易度	★	★	★	★	★	★★	★★	★★	★★	★★	★★

出典 **『日本文化における時間と空間』**（二〇〇七年・岩波書店）

筆者生前最後の単著である。日本の文化の伝統と現在において、時間や空間はどのようにとらえられているか。この大きな問題に関して、古代における「原型」にまでさかのぼり、また芸術や文学における表現も分析したうえで、現代日本文化における時間と空間の特徴を説くという構成を採って考察しており、筆者の積年の学究の集大成といっても過言ではない。とはいえその筆致は難解に陥ることなく明快である。本文は「第三部「今＝ここ」の文化」の「第一章　部分と全体」から採った。ただし、一部省略して掲載した。

筆者　**加藤周一**　一九一九（大正八）〜二〇〇八（平成二〇）年。東京生まれ。文芸評論家・作家。東京大学医学部在学中から文学に親しむ。終戦後に医学生としてフランスに留学するとともに、評論や文明批評の執筆も行い、帰国後は評論家として、多方面で活躍を続けた。著書に『現代ヨーロッパの精神』『日本文学史序説』『私にとっての20世紀』『夕陽妄語』など。著作の多くは『加藤周一著作集』『加藤周一自選集』などに収められている。

キーワード・重要語

◉日本（1行目など）

一言で「日本」といっても、それが指すものは多様である。本文では「日本文化」「日本国」「日本列島」という語が用いられているが、「日本人」「日本語」は一度も登場しない。注意すべきは、これら「日本」という語が、それぞれの間で適用範囲（外延）を異にしていることである。自分の「常識」を絶対視しないようにすべき言葉の筆頭が、この「日本」であると言えよう。

【表象（ひょうしょう／1、7、16行目）**】** 対象が心のうちに現れる作用。

【冬来りなば春遠からじ（ふゆきたりなばはるとおからじ／17行目）**】** 寒く厳しい冬が来た後には温かい春が訪れるはずだということ。イギリスの詩人シェリーの言葉。

【貿易摩擦（ぼうえきまさつ／47行目）**】** 輸出入の不均衡から両国間に問題が生じること。

解説

読解のポイント　筆者の主張を把握する

本文は日本文化の特徴を扱っているが、大きく分けて前半は時間、後半は空間について論じられている。豊富な具体例が登場するため、情報量は多い文章であるが、**〈日本では「今＝ここ」が関心の中心**であり、それ以外の時間や場所は二義的な対象でしかない〉という結論は明快であるため、この点さえしっかりつかめれば各設問への対応がしやすくなる。このように、**評論文では「要するに筆者が言いたい一点は何か」ということの把握が、設問への大きな突破口となる**ことは少なくない。

テーマ解説　日本文化論の特徴

「現代文」という科目の性質上、「現代の日本」に関連した話題の文章が出題されることがほとんどである。ただし、「現代の日本」の何らかの特徴を明らかにしたいときには、比較する対象があったほうがわかりやすい。よって、「日本」とは別の場所や、「現代」とは異なる時代（あるいはその両方）を取り上げて、「現代の日本」をいわば外側から見た（相対化）文章が「現代文」では頻繁に取り上げられるのである。今回の本文の場合は、近世以前の「日本文化」がもつ特徴をとらえた後、それが現代にも通じていることを指摘すると同時に、最終段落では、二〇世紀後半の「日本国の対外的態度」を他国と比較している。これは日本文化論に限られることではないが、**日本文化論の場合には特に、他との対比の構図を的確にとらえることが求められる傾向が強い**。さらに、発展的なことも述べておくならば、日本語以外の言語、日本以外の国や地域の文化や制度、現代以外の時代の事柄などを学ぶことには、それらを学ぶこと自体の楽しみ（や苦しみ）もさることながら、**現代の日本だけにとどまっていては見えないことが見えるようになる**という効用も備わっているのである。

入試情報

日本文化に関する文章は、最近のものだけでも二〇〇五年の吉田喜重（よししげ）「小津安二郎の反映画」、二〇〇七年の山本健吉（けんきち）「日本の庭について」、二〇〇八年の狩野敏次（かのとしつぐ）「住居空間の心身論――『奥』の日本文化」などセンター試験で頻出であるほか、国公立二次試験・私大入試でも定番の主題であり、類題には当たっておきたい。

読書案内

加藤周一『羊の歌』（一九六八年・岩波新書）

▼自伝的著作ながら、戦中・戦後の日本のさまざまな問題も縦横に論じた名著。

丸山眞男（まさお）『日本の思想』（一九六一年・岩波新書）

▼政治思想史の専門家が日本における思考や学問の特質を論じた古典的著作。